

憧れの人、過去の人

おおきなかぎは すぐわかりそう

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彼女とは主従の関係である。

彼女は義務の対象である。

彼女は許嫁である。

そしてこれらは……いずれ過去の存在となる。

目次

前菜	1
スープ	8
魚料理	15
肉料理	21
ソルベ	30
ローストの肉料理	35
生野菜	44
甘味	50
果物	57
コーヒー	69

前菜

大企業イットキコーポレーション。

その会社から僕の父は事業融資を受けていた。

かの会社、正確にはイットキ家の面々に、家族揃って頭を上げることが出来なかった。

巨大企業であるイットキが、なぜ中小零細であるタセツナ社に良くしてくれるのかは当時の僕にはわからなかったけれど、イットキ家のイベントに呼ばれた時の両親の態度で全てを察してしまったのだ。

優しくて恩情に溢れる自慢の父が、膝を地面へ接着し、両手をベツタリと地面につけ、頭を畳に擦り付ける。

衝撃の光景だった。母もそれに続くものだから、僕には何が何だかさっぱりで、ただ周りの様子を伺い周囲をキョロキョロ。

後に父の怒号が聞こえ、訳もわからず両親のポーズを真似っこした。人は皆平等であると、学校で習った。でも目の前で笑っている人々には、逆らっちゃいけないんだと幼いながらに直感する。

無表情。一段上がった座敷上。笑っている人々の中でただ一人、彼女だけはムツスリと退屈そうな顔をソツポに寄せる。

口を閉じるのを忘れるほどに整った顔立ち。白雪が降りしきったような一点の曇りのない肌。もの虚げな吊り目に、主張の小さい鼻。溶け込むような黒の長髪は、川が流れるように艶やかだ。

そんな視線に気づいた彼女は、僕の間抜け顔を見たのかクスリと笑う。途端に火が出るほど恥ずかしくなった。

「私達は大事な話があるから、ヒカリ様のお相手をしてくれないか？

コウキ」

「はい。わかりました父さん」

ふすまの向こうへと消える父。父は、父の仕事に専念しているのだ。僕も僕のやるべきことに専念しよう。相手を待たせては悪いとさっさと振り返り、先ほどより楽しげな彼女に向き直った。

「は、はじめまして。私はタセツナ コウキ、と申し上げます」

「ふっ。なにその日本語」

「なにか、ご希望はありませんか？」

「大人みたいで嫌い。普通にしゃべって？」

「……」

即興であるが、大人達と同じようにうまくやろうと頭をフル回転。しかしお気に召さなかったのか、雪のように冷たい彼女の無表情の前に言葉を失った。どうするべきかを考えあぐねている僕に、彼女は表情を緩めて助け舟を出す。

「大丈夫、言いつけたりしないから」

「それじゃあ……なにして遊ぼうか」

「そうねえ……」

そう言っつて、人差し指を唇の下に留め置き、考える仕草をした彼女が出した結論がこれまた僕を困らせる。

「面白いことして」

「え、ええー……」

鹿威しの声が同意を促し、いきなり面白いことをやれと言われ、ハードルも地味にあげられていることにパニックで気づけない。

何かしなきゃ何かしなきゃと、さつきまで緩やかだった彼女の表情が段々曇っていくことに恐怖心を覚えた僕は、……鯉のいる池に飛び込んだ。

「ねえコウキ、今からあの池に飛び込んでよ」

女子のグループが、ククススと笑いながら僕を見ている。そのなかの中心的存在であるヒカリにこう言われて、僕は彼女と会った時のことを思い出していた。

「……」

本当に池に飛び込むの？ と懐疑的な表情で見つめてくる取り巻きは一応にこちらを下に見て、噂だとかの類でその奇行が知れ渡っているはずなのに、クラスが入れ替えられて無知なメンバーへ、”自分がどんな立ち位置にいるのか”のお披露目会だ。

ここでも彼女の表情が冷え切って聞くのに耐え切れなくなった僕は、ドツドドツドと煩すぎる心臓を冷ますように、公園の水草が浮いた池に飛び込んだ。

「ほら見てよ！ 本当間抜けでしょ!?!」

キヤツキヤと笑うヒカリ。

飛び込めと言われて、公園の淀んだ水の中にその身を沈めるのがそ

んなに面白いのかと取り巻きは思ったが、彼女がイットキ財閥の娘である点から、合流しないのは後が危ないと皆一応に下手に拍手し下手に笑った。

その中の一人が勇敢にも、彼との関係性を好意的なものとして質問を投げかける、が。

「違うわよ、あれは単なる下僕。そばに置いてくれてうるさいから身の回りの雑務をやらせてるの」

まってましたとイットキは決まり文句を告げ、その場の誰もを総引きさせた。それでもそばに置いてるのだからと、空気の読めない子が再び質問すると。

「違う違う、コウキが一方的に私のことを――」

ザバリと池から這い上がり、頬にへばりついた水草を取っ払って、僕はいつものようにカバンを背負う。そこに高節を垂れ終わったヒカリが駆け寄って、小さく呟く。

「冷蔵庫の中身カラだったから、帰りにスーパー寄らなきゃ」

「そう」

っただけ短く解して、思うような答えじゃなかったのか、頬をムツクリ膨らませながら不満を示す。

「……ねえ、か弱い女の子を置いて帰る気？」

この全身ずぶ濡れの形態を見てもそんなことをいつてくるのかと、抗議する気は起きずむしろいつも通りと納得さえした。そんな態度が余計にいけなかったのだろうか、ヒカリの顔から楽しいといった好

奇心を奪っていく。

「あ、そ。確かに風邪ひいちゃいそうだからいいよ、帰って」

「一緒にいかせてください」

まってましたとメーターをプラスの感情の持っていく彼女。ヒカルはこれも予定調和と表情をコロコロかえ、表情を楽しい方へ持っていく。

「それじゃあいきますか」

自分の取り巻くを完全に放置する形で大丈夫なのかとちらりと彼女らを伺ったが、皆一様に視線を合わせずにいるだけで、口はニヘラと下手くそに歪んでいた。

「ねえコウキー今日のご飯なにがいいー」

「そうだね、パスタとかいいんじゃない？」

「わかった、じゃあ特売のパスタ茹でるねー」

彼女の住む一人暮らしの高層マンション。

そんな空に近い場所のお湯を一足早くお借りして、臭みが取れて出てきた途端にリクエストを取られた。

部屋は二人で過ごすのにも広々すぎて、外国人は日本の物件を狭すぎてトイレと表現するが、僕はトイレぐらいがお似合いなんだろうな

と勝手に答えを出す。

「あ、そうだ。あとでテストの結果見せ合いっこしようよ」

無地の黒のエプロンをする彼女が愉快そうにさういう。僕は黙って首肯で返すのだった。

「おまたせー」

彼女の作ったあさりを使ったスープパスタは、液体を白濁に染め上げ、いい出汗が出ていることを暗示する。散らされたネギと、強い香りのするニンニクに、ちよこんと置かれた鷹の爪が食欲をそそる。

リビングの机で向き合った二人は、手を合わせていただきますと唱えた。

「いただきます」

「あ、最後の数学の問題解けた？」

「ギリギリ、なんとか」

そんな他愛もない会話に花を咲かせる。ずるずると行儀悪く麺をすする僕に対して、ヒカリはこなれた手つきでフォークを巧みに使いこなし、パスタを端から巻き取っていく。

テーブルマナーを直々に仕込まれた身としては、本当は自分も合わせた方がいいのだけれど、プライベートなんだから食べやすいように食べたらと提案したヒカリの意見を採用した。

ちなみに、ヒカリはどうなの？ と聞いてみたところ、むしろ扱い慣れたテーブルマナーの方が食べやすいと語った。これが教養の差、つてやつなのか。

「そういえばさ、今日メガネの子とどんな話してたの？」

「……みてたの？」

「うん。あんまり他の女の子と仲良くしない方がいいよ？ だってほら、私たち許嫁だし」

「許嫁って、ウチの会社が業績悪い時の交渉材料なんじゃないの？ 僕たちが気にす「関係なくないでしょ？ お義父さんの会社だって、いつ経営不振に陥るか分からないんだから。もちろんイットキカンパニーにも利益のある話だよ？」

「うん……」

いつの間にかまとまっていた許嫁の話。

自分が外交の道具として使われているはずなのに、彼女のそばに居られると思うとそれはもう飛び上がって喜んだものだ。

けれどもそれは昔の話。昔は好きだった。と表現するってことは、今はどうなんだって話。僕はこの質問に、沈黙を貫いた。

スープ

「ねえ、テストで一位取って」

唐突だった。

親同士のよしみで、良いところの学校に入れてもらって暫くの出来事であった。入学して最初に行われた中間テストで、同クラスで男子の学年最高点が出て、それをキャアキャアはやし立てる女子を見てからの、命令だった。

「わ、わかった。出来るだけ頑張ってみる」

「頑張るとかじゃなくて、ちゃんと結果を出して。学年最高点は私がいるからそこまで言わないけど、男子の中での一位を目指さない」

ピシッと伸ばされた人差し指が、僕の鼻先をかすめる。白くて細い指先は、まるで氷柱のように冷たい空気を発しており、逆らったら氷像にされる錯覚すら覚えた。それが嫌ならコクコクと、車に取り付けの首振り人形みたいに頭を揺らす。

「それで？ 今回のコウキの順位は何位だったの？」

「……し、下から数えた方が早いかな」

「濁さずに見せなさい」

ハードルを下げてもらおうとした目論見は失敗に終わった。全教科の点数が刻み込まれたプリントを献上して、それをヒカリは流し目で見てみる。

「ふーん。コウキあんた手抜きしてるわけじゃないのよね？」

「そんなまさか!? ヒカリの顔に泥を塗るなんて恥ずかしくてできないよ」

「……まあいいわ。次の期末試験でその発言が嘘か誠かわかるわけだから」

「学年一位の私が直々に教えてあげるんだから、感謝しなさいよ？」

そういつて心底楽しそうに顔を綻ばせる彼女を見てみると、不安に押し潰されそうになるが、同時に彼女の期待に応えたいとする気持ちの方が当時は勝っていた。

「てか、タセツナが勉強できること自体意外なんですけど」

「あ、わかる。頭のおかしな行動とってるのに、こういうのをギャツブ萌え？　っていうんだっけ？」

「えくでもヒカリさんの操り人形みたいで気持ち悪いんだよね」

瞬間、空気が凍った。青ざめる面々の中で一際絶対零度を放つヒカ
リは、まるで自分自身が侮蔑されたかのような視線を失言者に送っ
た。

「……あんまりコウキをいじめないであげて？　私が遊べなくなっ
ちやうから」

「は、はい。ヒカリさん、ごめんなさい……」

「もーそんな必死に謝らないでよー。まるで私が悪者みたいじゃー
ん」

「……」

ケラケラと笑うヒカリに言葉を失う面々。それに気がついている
のかいないのか、本人は溢れ出る不快感を周囲に振りまいていた。

「ヒカリ、ジュース買ってきたよ」

そこにグループに不釣り合いな男子の声。両手に自販機の戦利品
を手にし、その片方をヒカリへと差し出す。

「ん、ありがとう」

受け取った当人は、手早くストローを紙パックに差し込んで、味見をする。新発売のライチ and オレンジ。好みの別れそうな表題に、果たして彼女の舌に合うのだろうか。

「味の方は？」

「……ライチとオレンジがまったりしてて、不味い。ん」

一周期だけ飲んだ紙パックを、コウキへ差し出す。それになんの疑問も抱かないまま、コウキは自分が飲んでいたお茶を差し出した。間接キスだなんて興奮していた時の気持ちなんて、もうとつくに忘れて
いる。

「……」

その光景を沈黙で見守る取り巻きは、仲良く二人して離れていく背中
中に何も言えないでいた。

「味はどう？」

「うん、よく食べ慣れた味だ。美味しいよ」

「……あのさあ、もっと情報ないの？ いつもそればかりだと、段々
料理に自信がなくなってくるから……」

「そんなこといわれても……」

一つの机を共有して、額を近づけるように会話する二人はヒカリが
作った弁当を広げ、小さな会食を催す。

どこにもでもあるような平凡な、卵・唐揚げ・金平ゴボウ・プチトマ

ト・茹でたブロッコリー。そして混ぜご飯が入ったメニューの顔ぶれに対し、味はもう絶品で、それを食べ慣れた味で表すのは別に手抜きをしているわけでは決してない。

けれども、別の感想を彼女が望んでいるのなら、もっとうまい言葉を捻り出さないといけない。箸先の唐揚げをじっと見つめて、何か言おうと口を開きかけた動きを、ヒカリの言葉が遮った。

「あ、今日頼んでた本の入荷日だから、放課後変わりに受け取ってきて？」

「………わかった」

出掛かった言葉とともに、この唐揚げを咀嚼した。

「コカゲさん、予約しておいた本ってありますか？」

「うん、バックヤードにあるから。ちょっと席外すね？」

学校の図書館は、その需要に似合わずに沢山の書物を蓄えていた。若者の活字離れが加速していると呼ばれているが、ただ単に紙の本を見るのが減っただけで、学生はスマホなどを通して画面上の活字に触れ合っている。

そんな流れの中、コウキの主人は大の本マニアで、よく図書室に”お使い”に行かされる。デバイスで本を読まずに紙の本を読むのは彼女なりのこだわりのようで、購入しないでわざわざ図書館で借りるのも、「本に部屋を占拠されたくないから」といった理由のようだ。

「はい。名義はイトトキさんでいいかな？」

「お願いします」

「またお使い？」

「うん、お昼休みに言われたから……コカゲさんは今日当番だったんだ」

「担当の子が体調崩しちゃったみたいで、それで私が代わりに……」

「テストの結果はどうだった？」

「あ！聞いてよタセツナくん。わたし数学の順位あがったんだよ！」

「それはすごいや、今度お祝いしなくちゃね？」

「気持ち嬉しいけど、タセツナくん忙しいでしょ？無理しないでいいよ？」

メガネをズレを直して、パソコンにデータを打ち込むコカゲさん。日々の緊張を涼ませてくれるような、そんな不思議な魅力に思わず頬が綻ぶ。気遣いの言葉に慣れていないせいかな、彼女のありきたりな言葉が妙に嬉しい。

「はい。一週間後の来週の金曜日に返却してください」

「じゃ、また今度」

そうやって名残惜しげに手を振ると、にっこり笑って手を振り返し

てくれる。今日は久々に運がいいなどカウンターを離れ、図書室を退出しようと思えば開けると……。

「へーずいぶん楽しそうに話してたね」

……つい先日指摘されたばかりなのに、楽しみに会話しているところをヒカリに見られた。彼女の表情は笑っているはずなのに、目の奥はなんだかドス黒い感情で、着色しているみたいに見つ黒だった。

思わず手に持った本を抱き寄せてしまう。その姿をクスクスと笑ったヒカリは、おもむろに肩を掴んで耳元に顔を近づける。

「コウキ……あんたテスト期間中、一人で集中したいってどっかに消えてたけど、まさかあの子の面倒見てたわけじゃないよね？」

沈黙は肯定とみなす。決定的現場を抑えられているせいで、黙っているのは不味いと理解しているはずなのに、息を吞まずにはいられなかった。

「呆れた。そんな余裕あるんだったら学年一位とってみなさいよ」

まだまだ余力があったことを悟ったヒカリは、自分が騙されていたのだと腹を立てる。それもどことも知らない馬の骨に、自分の所有物をいじくりまわされていたことが不快で仕方がない。彼女が次の鎖を繋ぐ。

「次のテストでは私を負かす気で来なさい。いいわね？」

実質、コカゲとの絶縁宣言に等しい命令だった。

魚料理

「はい、お手」

当時仲良くしていた女友達と喋っていると、ヒカリはまるで挨拶するかのようにその口火を切る。目が笑っていない。慌てるように利き腕を差し出した。

「ワン」

「？」

「鳴け、ほら。ワン」

「わ、ワン」

一連のやり取りが終わると、さっきまでの表情が嘘みたくに破顔して、両手で頭を撫で回してくる。

「グッボーイ！ グッボーイ！」

しっかりと目線を合わせて、それはもう恥ずかしいほどに褒めてくれる。顔を赤く染めて、髪をわしゃわしゃされるのを、女友達は苦笑いで見つめていた。横目でその事実を確認しながら、けれども振り切ることも出来ずに手をこまねく。

後で知ったことだが、気まぐれのように繰り返されることとなるこの行動は、軍隊でいうところの返事みたいなものだ。ヨーソローとか、サーイエツサーとか、レンジャーみたいな。ちゃんと話を理解しているか？ 私の命令に従えるのか？ その確認のために、僕はこうやって意思表示をさせられる。

「どうぞ？　つひけて？」

さつきまでのことをなかつたことにするようになり、黙って見ていた女
友達にヒカリはそういう。その表情は、コウキのとなりには誰が相応
しいかの、強欲を誇示するような汚い感情が見え隠れしていた。

「はい、お手」

「……ワン」

図書室の前で、奇妙な返事をする。利き手には本を抱えていたた
め、反対の手でヒカリの希望に応える。図書室の中にいるコカゲに聞
こえないように、いつもより気持ち小さな声で返事した。一瞬、不味
いことをしたのではと冷や汗が滲んできたが、ヒカリは返事をしたこ
とに満足して、頭につかみかかってくる。

「グッボーイ、グッボーイ」

落ち着いた声色で、胸まで抱き寄せて、内心はコカゲがいつ図書室
から出てこないかとおっかなびっくり扉を窺う。

「さ、帰りましょうか」

抱えていた本を鞆に詰めて、はい。と差し出された僕の鞆。もしか
して、今日コカゲさんが当番であることを知っていたのか？　とヒカ
リに問い詰めたかったが、新しい本を借りてご機嫌に鼻歌を口ずさむ

その背後に、何も語りかけずにいた。

いつものように買い出しを手伝わされる折り、荷物を持つ手を突如引つ張られ、バランスを崩しそうになる。

「これ、コウキに似合いそう……」

ウィンドウショッピングでもするかのように、ショーケースを見つめるヒカリの視線の先には、一体のマネキンが服を着ていた。

生憎、僕はファツションに疎くて、それならばとヒカリが選んだ服のセンスに頼りっぱなしだ。まるで、母親に服を選んでもらう成人男性みたくに情けなくなる。

よく分からない用語を羅列され、同じ色にしか見えない服に首を傾げ。一度始まってしまえば、あつちらこつちら店に引つ張り回されるんだから荷物持ちとしてはいただけない。

チラチラとショーケースのモデルと僕を交互に見て、ムムムと眉間にシワを寄せて。また引つ張られることが予測できたので、今度は転びそうにはならなかった。

「んん！ いい買い物した」

夕暮れに染まる街で、伸びやかに横曲げの運動をするヒカリ。

その背後から、ガサゴソと紙袋とビニール袋を上下させる荷物持ちが遅れて登場。

今回だけでかなりの出費となってしまうた。別に服を買ってくれることに苦言をていしているのではなくて、自分にお金を使われれば

使われるだけ、釘を打ち付けるみたいに恩を売られている気がして素直に喜べない。

けれども、許嫁と呼ばれるカードを手にするタセツナ社にとっては、相手をしてくれるだけまだマシなのだ。イツトキ家が、いやヒカリが一声かけるだけで、僕らの関係なんて灰へ帰るのだから。

だから、こうまでしてヒカリが僕をそばに置くのかがいまだに理解できていない。ただの気まぐれ、暇つぶし、ペット……。どれもいい印象を持つことはないだろう。

「お肉が痛むから早く帰らないと」

「そうね……私も早く本が読みたいし……」

ゼエゼエと、限界を口にしないものの辛そうな顔をするコウキに、ヒカリは近寄って一言告げる。

「もうちょっと頑張つて？ 最後まで運んでくれたら、今日はコウキの大好物のハンバーグにするから」

「……」

それだけ告げると、用は済んだと先行して、時折ちゃんについてきているか確認する親みたいに振り返る。

持つてくれと情けなくいつてみることも出来たが、唯一の安らぎであったコカゲとの時間を奪われた反骨心で耐え忍ぶ。

ようやく高層マンションのエントランスに辿り着き、ヒカリが鍵を差し込んで一言。

「流石に辛そうね、玄関まで半分持つよ？」

「いいよ、ヒカリに重いもの持たせるわけにはいかないから」

「あ、ありがとう」

”ふんぬ”と掛け声を出して、ヒカリが片っぽの荷物を受け持つ。が、ここまで来たのなら最後までやり切つてやると、ちよつとだけぶつきらぼうに触れた手を払った。

怖くて表情の確認はしなかったが、立ちすくむヒカリを置きっぱなしにして、エレベーターホールへと向かう。

荷物を下ろすと、早速夕飯の支度に移る。

手際よく慣れた手つきで食材を捌いていくヒカリの背後で、本日酷使した拳を広げる。一文字の色が抜けた部分が、手を開閉するたびに正常になるのを感じた。

「コウキお肉こねてー」

「わかった」

手の感覚もおかしいままに、極寒のひき肉に手を沈める。その後の食事はまでは特に問題なく終わり、気になった点をあげるとするならば、今日のハンバーグは一回り大きかったことだろうか。

洗い物は僕の仕事だ。ヒカリは今、さつそく貸し出した恋愛小説をよくみふけている。カチャカチャと食器同士が触れ合う音と、止めどなく流れる水の音。そして一定の感覚で紙をめくり上げる音だけで世界が成り立っていた。

ここだけ切り取れば、まさに主人と奴隷の構図。

「ねえコウキー」

「ん？」

「余命僅かの幼なじみにかける言葉は？」

「……………ごめん、わからないや」

「……………フーン」

問題を出すみたいにか課せられた言葉は、一見するとただの無意味。小説に刻まれた答えを教えてくださいるわけではなく、また不回答でもおとがめなし。これは自分の体感だが、真面目に応えることが前よりも少なくなっていると思う。

最後の食器を乾燥棚にかけ、タオルで手を拭いて、筆記用具を取り出す。ヒカリが小説に夢中になっている今ならば、ちやちやを最小限に抑えて勉強ができる。紙をめくる音と、今度はシャープペンシルのカリカリとした音が重なり合う。

肉料理

「おいイトトキ。お前自分が大企業の令嬢だからって調子乗ってるだろ」

いい学校とは、お金のかかる学校である。極論をいうとそうだ。

なぜなら、お金を積まれるということは、それに見合った対価が用意されている場合が多いからだ。もしも支払う金額と釣り合わないと思つたのなら、金持ちはさっさと他の学校に転校するだろう。

しかし世の中は面白いもので、金を持っただけのボンボンが、いい学校に紛れ込んでしまうこともしばしば。中等部時代の一コマ。ここに一人、一時の感情だけで全てを棒に振るう哀れな男が。彼は軽い調子で、椅子をギシギシ傾けながら、ヒカリのことを馬鹿にする。

「は？ なにいつてんの？ あんたらが猿みたく喋ってうつつさいから、注意してあげただけじゃない」

対面する男子はボリボリと頭をかいて、仲間内に目配せする。類は友を呼ぶとは、言い当て妙である。

立ち上がる男。一瞬怯むヒカリ。しかし互いにグループを後続に控えているので、もはや後には引けるような状況ではない。

椅子から乱暴に立ち上がった男は、何より女が嫌いであった。それは母親の愛情を受け取れなかった歪みなのかもしれない。特に嫌いなタイプが、自分がか弱い女の子だから、男子は暴力を振るうはずがない。といった、相手に信頼を押し付ける、その態度が気に入らなかつた。

イトトキ ヒカルその人は、上記の条件に合致する。

「ほら、なんとか言ってみろよ」

「……私に手を出したその瞬間、イツトキカンパニーがお前を殺す」

「へッ。優しくない男子とわかったら今度は権力で脅すのか」

特に逡巡することなく、胸ぐらを掴まれ体を持ち上げられる。相手に常識が通用しないとわかった取り巻きは、皆一様に動きを停止させた、次のターゲットになんて誰もなりたくはない。

始めは乗り気を示していた仲間も、そこまでやるのかと慌てて咎めにかかる。しかしそんな忠告を素直に聞けるのなら、始めからイツトキなんぞに目はつけられない。

「おら、さっきまでの威勢はどうした」

「……」

先ほどまで高圧的な態度であったヒカリも、流石に目線をそらさずにはいられない。たとえどんな報復が待っていようと、今この瞬間だけは、彼女に暴力をふるうことが出来るのだから。

そんな弱気な態度が余計に相手に付け入る隙を見せる。調子に乗った女に、制裁と伸びる腕。予備動作を目の当たりにしたヒカリは、恐怖心で目をつぶる。伸びた手はそれきり前には出なかった、誰かが両手でストップをかけたからだ。

「何してんだお前」

「ヒカリから手を離してよ」

「女の前だからってカッコつけてんじゃねえぞ？ お前から先にぶん殴ってやろうか？」

「……」

足が震える。殴り合いの喧嘩なんかしたことなんてなかった。けれども、父の会社を保つ”契約”としての側面。初恋の相手を傷つけさせまいとする”義憤”の心。その二つが合わさり、かろうじて二本足で立っていた。

もしも、”契約”だけの間柄だったのならば、彼がこの場に介入することはなかったであろう。それだけ強いのだ、人に惚れてしまった奴というのは。

両手で塞がれて腕を動かせないの、ヒカリの拘束を解いて振りかぶる。

机が跳ねた。女子の悲鳴だ。みっともなく、受け身を取れずに転げ回る。男は机を切り開いて道をつくるのを眺めてから、視線をヒカリへと戻す。

今度はお前の番だと言いたげに。

「やめろ!!」

悲痛な叫び声。めんどくさそうに視線を送る男。気が付けば何も考えずに突っ込んでいた、体が動いてしまったのだ。

男が体勢を整える前に相手に取り付く。

格好のサンドバックに、攻撃が加えられる。

猛烈なラッシュは、先生が生徒を取り押さえるまで続いた。

「()は?」

「保健室だよ、コウキ」

目を覚ますと、寝かされていて、コウキが発した疑問にヒカリが答える。

「ヒカリ？ 怪我はない？」

「うん。おかげさまで」

「そうか……よかった」

「よくないわよ！ なんなのあいつ！ 頭オカシイんじゃないの！」

「イツトキさん？ 保健室では静かにお願いしますね？」

「は、はい。ごめんなさい……」

萎んでいく元気なヒカリを見て、安堵の気持ちと共に息を吐き出す。どうやら怪我を負ったのは無駄にならなかったようだ。後半は意地でしがみついていたので、気を失っていたのかもしれない。

「いつツ」

「き、傷が痛むの？ すごく殴られたから……」

「いや大丈夫だよ、多分打撲の怪我だから」

「……なんであんな危ないことしたの？」

「ヒカリを放っておけなかったからかな……」

「へ、へー」

クルクルと髪の毛先をいじくりまわし、満更でもない表情で視線を逸らす。そんな表情をみてしまったのなら、僕だって顔があかくなってしまう。そんな恥ずかしさを隠すように、ヒカリは先ほどの感想を伝

えた。

「ちよつとだけカツコ悪かった。でも、ちよつとだけカツコ良かった。……でも私のそばにいたいのなら、格闘技の一つや二つ、覚えなさい。……私の伝でいい先生を紹介してあげるから」

そうやって手元を弄るヒカりに、僕は何も言えないでいた。

「外に行こう」

ボタンと本を閉じたヒカ리가、とつぴにそう告げる。

現在の時刻は23時過ぎ。会うべき人にあつたなら、間違いなく補導ルートだろう。けれども今日は金曜日。最後の日曜日に夜更かしする勿体なさを考えたなら、理解できなくもない考えだった。

「今日買った服に着替えて準備して？」

お風呂にも入って、もうラフな格好にも着替えたのに、そんなこと無視するようにヒカりは命令を告げる。こう言い出すとヒカりは決して自分の意見を曲げはしない。大人しく従っておくのが賢いだろう。

「わかった」

夜の街に二人は繰り出す。

「へえ〜ヒカリちゃんっていうのかあ〜」

「気が強そうだけどタイプだなあ〜」

「もお〜そんなカリカリしないですよ〜」

「!」

ヒカリに触れようとした一人を殴り飛ばす。瞬間相手の表情が変わって、一気に三体一に纏れ込まれた。

しかしこつちには、守らなければならぬ対象がいる。

「ぶっ殺してやる!!」

殴られた一人が殴り返しにかかる。

背後にはヒカリが。

避けるわけにもいかずカウンターをお見舞いする。

冷や汗が頬を伝った、久しぶりだったが体は動いてくれた。まず一人。

一人倒されたことで野郎達に動揺が広がる。このまま距離をジリジリと攻めていくと、相手の方から降参した。

「ご、ごめんなさい」

「からかってすみませんでしたあ」

倒れ込んだ一人を抱えて、そのまま尻尾を巻いて逃げていく。

すっかり相手のことを見送って、警戒を解いた。

ドツと疲れがのしかかってくるようだ。背後でパチパチと拍手の音が。

「カツコ良かった」

「……うん、ありがとう」

本当なら避けられた諍いだ。

それに、三体一で勝てるのなんて物語の中の話。もしも彼らがしっかりと連携をとっていれば、危なかったのはむしろこっちだった。

喧嘩に武道を持ち込んではいけないとの教えも破ってしまった。

そんな複雑な感情を内に秘めて、ヒカリの賛辞を受け取る。満足したのか帰路につくヒカリ。彼女は上機嫌で鼻歌を混じらせるのだった。

ソルベ

「世界が浮かれる聖なる夜。

降り頻る雪の日、ザツザツと雪を刻む音。

ラッピングが施されたプレゼントを胸に、踏み締める感触は次第に早く。約束の場所へと急かす急かす。

コンコンとノックすれば、遅れて扉は開かれん。

「これ！・クリスマスプレゼント！」

そう言つて少年が差し出したのは、姫とナイト、そしてドラゴンが描かれた本であった。

ヒカリが本好きというのは知っていたので、自分がもつともお気に入りの英雄譚の本を彼女にプレゼントした。

流星に自分が所有するボロボロの本を送るのは気が引けて、お小遣いとお手伝いをやりくりして、ようやく手にした代物である。

満面の笑みで、新品のピカピカとした表紙を差し出すコウキに、ヒカリは驚きながらもその手に取ってみる。暗雲立ち込めるお城を背景に、真紅のドラゴンが真っ赤に燃え盛る炎を吐き出し、姫を庇うナイトの盾へ殺到している。

正直な感想。男の子が好むようなお話が、果たして私に合うのだろうか？ そんな疑問を飲み込んで、目を純真にキラキラとさせるコウキへと視線をくべた。

「ありがとう。大切にする」

そう微笑みを浮かべて、ギョツと抱きしめられる絵本。コウキは赤べこのように点頭を繰り返す。二人で過ごすささやかな夜。薄暗い閑所、持ち込まれたお菓子、ただ一つの明かりを共有して。

深夜もすぎた頃合いに、私とコウキはマンションへと帰宅した。どっと疲れた様子のコウキは、リビングに着くなりソファに倒れ込む。

「疲れてるの？ まあ当然ね。どう？今日はベットで寝る？」

「……そしたらヒカりはどこで寝るの？」

「それはもう、上手くやるわよ」

腕で額を覆って、疲れている様子のコウキに提案する。

けれど、私への気遣いが疲れを上回るのか、どこか同伴することに否定的だ。

「そんなところで、首痛くならないの？」

「もう慣れたよ」

ついには腕で視界を覆って、外部との繋がりを断った。

どこか諦観したような態度。少しだけ物申したい気持ちもあったが、明日もコウキとたくさん遊ぼうと思いを切り替えて、さつさとシャワーを浴びに向かった。

温水の雨に打たれながら、今日のことを振り返る。

やはり一番印象的だったのが、暴漢に颯爽と立ち向かうコウキの姿だ。

普段は大人しいコウキが声を荒げ、あんなに必死になって私のこと

を守ってくれた。

ポツと火が灯り、胸が満たされていくのがわかる。

昔、プレゼント表紙に乗っていたナイト。物語の出来事に、私とコウキを当てはめる。

愛してる。そんな言葉はもう聞き飽きたが、私がコウキに愛されていることを肌で実感するのがこんなにも心地いいなんて。選んだ服を馬鹿にされた時は少々頭にきたが、それも無様に逃げ帰った後ろ姿を思い出せば、胸の空く思いだ。

……もう少し積極的などころがあれば、私の好みドストレートなものにな。

そんな内なる思いは相手へ届くはずもなく、降り注ぐ水を塞き止め、タオルを引つ張り出して体に巻く。ソファアで腰を悪くしないだろうか。ひよっこり顔を出して伺ってみるが、スースーと寝息を立てる音だけが聞こえたのを確認して、自分の部屋へと向かった。

白で統一された色調。

無駄なものは一切ないミニマムな部屋。

女の子趣味なフリフリしたベット。三面鏡がついたドレッサーは、足の部分が曲線を描くアンティーク調。そして単一色で仕上げられた白いチェスト。

チェストは宝箱みたいに上下の開閉式で、機密保持のための鍵穴もついている。

ささつと着替えたヒカリは、お目当てのものを取り出すために白いチェストを開ける。ちよつと中身を弄ると、色はくすんでいるが綺麗な状態を保っている絵本が出てきた。

表紙を撫で、ついで中身を開き、名残惜しげに文字をなぞる。開け放たれた箱をよくみてみると、いままでにコウキに送られたプレゼントが綺麗に整頓されていて、その光景だけでヒカリは顔を綻ばせる。挿絵で描かれるナイトを撫でて、夢みがちな少女は静かに夜を過ごす。

コウキはベーコンが焼けるいい匂いで目を覚ます。ゆっくりとおぼろげに目を開けると、一足早くヒカリが朝ごはんを作っていた。

「あ、コウキおはよう。朝ごはんもう少しでできるから顔洗ってきて？」

「うん、おはよう」

テキパキとお皿に盛り付けをするヒカリ。

トースターが焼き上がり知らせるベル音を鳴らし、駆け寄って食パンをお皿に移す。

クワツと一つ伸びをして、目頭ももみこんで血流を促進。案外、人は慣れてしまえばどこでも眠れるのでたくましい。顔を洗って戻ってくると、すでに朝ごはんは出揃っていた。

「食べましょ？」

「うん」

「いただきます」

朝だからそんなに量も多くない。備え付けのサラダをムシヤムシヤ青虫の如く食べていると。

「今日は海に行きたいな」

「……そうだね」

またいつもの如く、勃然と飛び出るあの場所に行きたい。個人的に

は、ヒカリからプレッシャーをかけられている勉強を進めたかったが、今からでも間に合うのだろうか。

「昨日わからない問題があったんだ」

「見せなさい」

テキストを取り出すと、飯を片手間で次々疑問が消えていく。

「これで全部なの？」

「うん」

「じゃあお出かけできるよね？」

「……うん」

ヒカリはこう見えても教えるのが上手い。

勉強が得意な力と、人に教える力は別物かと思うが、ヒカリはその辺りの才能があるのかそつなくこなす。

そういえば、コカゲに勉強を教えている時、わかりやすいと褒められたことがある。長年一緒にいるもんだから、ヒカリの教え方がうつつたのかもしれない。そう考えると複雑な心境だ。

ローストの肉料理

「ケホ、ケホ」

「ヒカリ大丈夫？」

「うん、年に一回のイベントみたいなものだから」

体調を崩し、苦しそうに不発の咳をするヒカリ。

ベットでその身を安静にして、厚手の布団で体を覆い、特徴的な彼女のつり目もこの時ばかりは力を失う。

ヒカリは別に病気がちではないのだが、傍若無人を地で行く彼女は、他の人よりもそれだけ病気を集めてしまうのだろうか。と勝手なことを考える。

「それよりも、早く学校に行ってきなさいよ」

「ヒカリを置いてはいけないよ！」

「ちよつとうるさい、頭の中がガンガンする」

「い、ごめん」

「……ハウスキーパの一人でも呼んで、その人に面倒を見てもらうから」

「でも……」

「勉強で成績あげるんでしょ？ だったらなおさら休めないじゃないかい」

「けど、ヒカリ今日ずっとベットのの上なんでしょ？ 今日いちにち退屈だよ？」

「……」

言われて気付く、動けないことへの不平不満。その点コウキは私のことを理解しているのだと得意になる気さえして、鼻が高くなる。

「それでも学校をずる休みするのはどうなの？」

「？ ずるなんかじゃないよ、ちゃんとヒカリのこと見守ってるんだもん」

一本取られたと布団を被るヒカリ、どうしたんだろうと首を傾げるコウキ。こつちに分がないのがわかってしまうと、ヒカリは受け入れるようにサボリを指示する。

それに笑って答えるコウキに、なおさらモヤモヤと掻き乱されている。いいや、これは風邪特有の症状で、この高鳴る鼓動は錯覚なんだと自分に言い聞かせて。

「えっと、それで看病ってどうすればいいんだろう……」

「はあ、とりあえずお水頂戴？」

「うん、わかった」

パタパタと背を向ける離れるコウキに、フウと息を吐いた。

これではどつちが介護される立場かわからないじゃないか、と。しかし普段とは違う一面も窺えるこの機会に、前回前々回と病床に伏している時とは違い、楽しさを見出すのだった。

日曜日。出掛け先からの帰り道。

込み合うような電車のなかで、どうもヒカリの様子がおかしい。

「どうしたの？　気持ち悪い？」

ゆつくりと頷いたヒカリ。熱っぽさがあるような、ぼうぼうとした態度はいつもの威圧感を薄める。取り敢えず新鮮な外の空気を取り入れさせるため、途中下車する。

ベンチに座らせ、新しく買った冷たい水を飲ませて様子見。

「電車の音うるさい。頭がガンガンする……」

「あと一駅だから、そこまで我慢できる？」

「ん、頑張る」

人が雪崩降り、雪崩れ込むその波に乗って、二人は無事電車に乗ることが出来た。

「明日の朝には治るのかしら……」

「難しいんじゃない？　ピークはまだ先っぽそうだし」

帰宅した二人はすぐにもヒカリの部屋へ移り、看護の体勢を取った。

それなりに数をこなして経験値もあるコウキにとってみれば、一種の資格のようなものだ。

「ねえあれが食べたい、コウキの作ってくれるカレーライス」

「あんまり病人が食べるものじゃない気がするけど。わかったよ、材料買ってくる」

普通ならもつと消化のいいものを食べさせるのがつねだけど、一番の目的は栄養を付けさせて力をつけさせることだ。

相手の好みを聞き入れることは、ただでさえ落ちがちな食欲を引っ張り上げる。

美味しいご飯は免疫力をつけるのにもってこい。それが相手のリクエストならなおさら聞き入れるべきだろう。

久しぶりの買い物に、少々緊張気味で必要なもののメモを取る。財布はしっかりと忘れずに持って、いざ出発。

いつもよりも数段ワクワクしているように見える彼の物腰は、あながち間違っではない。

スーパーで買い物を終えたコウキは、見覚えのある背後に心奪われる。

見間違うはずもない、やはり自分は運がいいと、その背後へ駆け寄った。

「コカゲ？」

ふっと偶然を装うように声を声をかける。背格好で確信に近いものを得ているが、あえて自信のない風を真似て、相手に振り返る余裕を与える。

同じように買い物袋を携えた、二日ぶりともいえるコカゲが驚いたように眉をあげた。

「あれ、タセツナくんだ！ 今日はどうしたの？ ヒカリさんは？」

「うん、病気でちよつと寝込んでちゃって。だから代わりに買い出し」

ヒョイつと、カレー材料の詰まった袋を持ち上げ説明する。

「うわ〜タセツナくん偉いね！ なに作る予定？」

「ヒカリがカレー食べたいって駄々をこねたから、わざわざ固形カレーなんかを買い揃えてね。コカゲさんは？」

「偶然！ 私もカレーなんだよ！」

コロコロと変わる表情。

彼女が裏表のないような、正直な人間であることを理解せずにはいられなかった。

「それじゃあ！ ヒカリさんによろしく伝えておいてね？」

「ちよ、ちよつとまって!!」

「？」

あまりにも早い切り上げに、つい声をかけてしまった。

自分でも驚くような大きな声に、動揺を隠せない。

けれどもこのまま黙っているわけにもいかず、なんとかして次への布石を打とうとする。

「明日。月曜日時間作れないかな？ 前に話したテストの点数が上がったお祝いをしようよ」

「いいの？ タセツナくん、ヒカリさんのこと放っておいて」

「大丈夫だよ、ヒカリは少し我儘すぎるから。こっちの言い分も聞いてくれなきゃ」

お祝いと聞いて、コカゲは一瞬喜ぶような仕草を見せる。しかしヒカリの影がちらついたのか、遠慮がちに質問を返した。

あの調子だと、明日まで風邪は長引きそうだから、放課後の一時間程度ならなんとかごまかせる。そんな腹づもりで、軽い調子で大丈夫だと伝える。

いつもは監視の目があるので難しいが、今回はまたとないような好機。絶縁宣言が発令されているのも忘れて、目の前の報酬にかじりつく。

「そっかー……じゃあ明日。楽しみにしてるからね？」

「うん、また明日」

今度こそ”それじゃあ”と別れを告げるコカゲの手に、流行る気持ちを押しさえながら手を振った。

「おかえり、コウキ」

「……寝てないとダメじゃないか」

「だって……退屈だったんだもん」

晩ご飯の支度をしながら、そんな会話を繰り広げる。

いじけるように目線を下げたその動作で、コカゲとあっていた事実がバレていないことを確信した。

一瞬たった鳥肌も、やがて落ち着きを取り戻す。

「部屋で本でも読んで待つてて？」

「やだ、後ろでみてる」

相変わらず融通が効かない。

けれども、これで風邪が長引いてくれれば、コカゲとの約束が果たせる。

明日まで長引きそうと予想をうったものの、どこからか湧く不安を払う材料にはうってつけた。そんなヒカリの行動に久々感謝した。

ジーと眺める、背後を見つめる視線に恐怖心を抱く。

何もかも見透かしてしまいそうな注視。

包丁を扱いながら、自分の指を切らないように細心の注意を払っていると、ヒカリが飛びつく。

脅されるんじゃないかとビクツと肩を震わせて、そのあまりの驚きぶりにケタケタヒカリは笑って、首筋に顔を埋めてくる。

風邪は相手に移すと治りがなくなるなんて話があるが、あくまで白を切るのに堪え兼ねて、風邪を移してコカゲとの約束を引き裂こうとしているんじゃないかと変な想像をしてしまう。

いやでもしかし、いつもとは様子の違うヒカリに、それは違うよと言いつけることもできず、尻尾を絶対に掴ませまいと意地を張る。

その後も続くヒカリの攻撃。

包丁とか火を扱うので危ないのは百も承知だろう。

いつ切り出されるかわからないコカゲの話に、ヒカリが体から離れるまで生きた心地はしなかった。

朝早く目が覚める。

固まった体をほぐしながら、時計を見る。

いつもなら、ヒカリがキッチンに立っている時間帯だ。

しかし、その姿はなく。その事実には安堵と共に嬉しくなって、ヒカリの様子を探るために寝室に向かう。

コンコンとノック。返事はない。ゆっくりと開けると、ヒカリは本を読んでいた。

「なんだ、起きてたんだ」

「うん、ついさっきまで寝てただけど……」

「調子はどう？」

「まだちよつと熱っぽいかな」

「あんまり無理しないほうがいい、今日は学校休んだら？」

「うんそうする。……コウキは？」

「ん？」

パタンと呼んでいた本を閉じ、何かを求めるような視線に対して、コウキは極めてごく平静を装いながら言葉を選んだ。

「そうだね。授業の遅れが出るといけないから、今日は学校に行くよ。ヒカリの分のノートも取らないといけないし。ね？」

「ふーん。そう」

なるべく気分を悪くさせないように、効果の程はいかほどかと確認を取る。

ヒカリは別段怒る様子もなく様子もなく、寂しげに本の表紙を見つめていた。

「朝ごはんはどうする？ 作ろうか？」

「……ううん、いまはちよつと食欲ないから」

「ならお昼はカレーを温めて食べてね」

「うん」

急に元気を失ったヒカリに、若干の不気味さを禁じ得ない。

それでも学校にむかう口実ができたと、リビングの菓子パンひとつ袋から取り出し、パツクリと口に運ぶのだった。

生野菜

不快感、嫉妬、嫌悪。

その感情に以下ほどの名前をつけようとも、目の前で繰り広げられるやりとりをただの手放しで喜べる奴なんて、果たして世界にどれほどいるのであろう。

昔馴染み、とはあまりいいたそうではないが。中等部からのヒカリと面識がある取り巻きの一人は、コウキがヒカリのために尽くし、またヒカリも満更でもない状態に嫌気が差していた。

最初こそ、素直になれないヒカリに対して微笑ましい気持ちも少しばかり抱く。だが、こう何度も目の前でラブコメを演じられると、どんな聖人君子だってさすがにイライラ来る。

美女と野獣カップルとまではいかないものの、特別イケメンでもないコウキに、ヒカリがゾッコンなのがそれはそれで腹立たしい。

雑誌に印刷された、まさに女子力を全開にしてくれそうな眩いほどのイケメン。

キヤアキヤアと鼓膜破壊兵器ともなり得る黄色い声援に、いつかは背を向け、妥協とも言える男性と愛を育んで行かなくてはならない。ヒカリほどの容姿があれば、黄色い声援の中の選ばれた一人になれる素質があるだろうに。

わざわざかくや姫みたいく、下界に降りるその行為を影から笑ってやれば、今度はどこもパツとしない凡夫にご執心。

運命の出会いとでも言いたげに声に喜色が乗り、心底楽しげに顔を綻ばせる。昔のキツイ性格の角は次第に取れ、彼との幸せな未来しか見えていないような盲目ぶり。

いつからか、決定的な温度差を孕んだ白い目が、ヒカリの周囲を取り囲んでいた。

正攻法ではおそらく勝てない。というよりも、イツトキカンパニーの財力が圧倒的抑止となつて、二人の甘々な空間を守護していた。ならば、彼女にやってもらおう。

どんなに堅牢な城砦も、内側から火の手が上がりれば落城は免れない。言葉を交わすまでもなく頷き合う。彼氏との仲に亀裂が生じていたり、まだ見ぬ彼氏を切望する乙女の導火線に火花が散った。

幸せでお腹一杯で困っちゃうと喋り出しそうなヒカリに、おっかなびつくりと言葉が届く。

「コウキ君って素敵な人だよね〜」

「あ！ わかるー。付き合ったりしたら一番優しくて良い人かもね」

「成績も優秀でスポーツも拔群。それに物怖じない性格で、努力家で、格闘技も習ってるんだっけ？ 自分より弱々しい男なんて論外だから、彼氏にするならあんなタイプかな〜」

尚も続く、コウキを褒め称える言葉に、ヒカリは凶らずもクルクルと毛先をいじり自尊心をくすぐられる。しかし、ある段階からその気持ちは波が引くように後退して、今度は心配や不安と行ったネガティブ思考が押し寄せてきた。

「でもさー、もしもコウキ君が浮気をするような節操のない人間だったら、今までのプラスも吹っ飛んじやうよねー」

ピタツと止まるヒカリの動き、しかしコウキといままで積み上げてきた思い出のカードを引き合いに出して気持ちを落ち着かせる。コウキがそんなことするはずないと自分に言い聞かせ首を振るった。

「でも素敵な人には変わりないから、ワザと誘惑するような女子の一人や二人いても、不思議じゃないかも」

あつけらかなと言いつその言葉。

常識的に考えて、大企業の娘の相手に手を出すなんて自殺行為も甚

だしい。けれども恋の魔力の前に、トップの成績を誇るヒカリですらめくらにならざる負えない。自分がコウキのような素敵な男性に出会えたとして、その相手が、恐ろしいほど大きな会社の娘だとしたら……。

こんな異常事態、通常なら諦めて身を引くのが普通。だが、コウキに絶対的な執着を見せるヒカリ自身にとって、そんなリスクを許容した上で突っ込んでくる可能性を拭うことができなかった。

ゆえに恐怖する。もしもの延長線上にある、愛しのコウキが誰ともしれない相手と駆け落ちする、そんな偶然にも針に糸が通るような可能性に。なんともいえない表情で沈黙するヒカリは、ほくそ笑んだ取り巻きの姿を捉えることが出来なかった。

「ねえ……コウキは私に隠し事とかしてない？」

「どうしたのヒカリ？ 突然」

「う、うくん……ちよつとね」

そこに、常日頃見られるような楽しげな雰囲気はなかった。

コウキの言葉の端々、一挙手一投足まで目線に気を配り、コウキが自分を裏切っていないか。そんな兆候を探す。

しかし、いくら考えを巡らせようとも答えは出るはずもない。コウキ自身に、他の仲良くしている女の子とどんな関係なのかと問い詰めることもできたが、そんなことをして望んだ結果が得られないことぐらいヒカリでもわかっている。だからこんな方法で不安を紛らわせる他なかった。

「ねえコウキ……私にキスして？」

「え、え!? ここです!!」

「……うん」

モジモジと顔を朱に染め体をくねらせるヒカリに、コウキは確認をとる。

いきなり大胆になりすぎじゃないかと周囲を見渡すが、突然大声を上げた声に、同級生の視線が集まるばかり。

こんな場所での公開羞恥なんて、ヒカリの趣味だっただろうか？でもヒカリが望むのなら……。

「う、うん。わかった」

「じゃあ……ん」

目を瞑り、唇を控えめに尖らせて、朱色に朱色をなおのこと塗り重ね彼女はその瞬間を待ち望む。

さつさとヒカリの望むことをしないといけないことはわかってい
る。だが、先ほど集まった視線がそうとはいかせない。ワタワタと慌
てふためき動揺するコウキの姿を、片目を薄く開いたヒカリが捕らえ
た。

恥ずかしいのは、むしろキス顔で待機させられているヒカリの方な
んだと理解が及べば、痛いほどに波打つ心臓に鞭打つ以外選択肢はな
い。

心の準備だとか雰囲気だとかは蚊帳の外。理由はどうあれ、それ
も望まれてしまえば全力で応えるように上半身が机を跨ぐ。

つんぐりつぼめられた、彼女の魅惑的な唇に触れる瞬間に、あろう
ことか狙いは意図的にそらされた。急接近した顔を急なカーブを描
き、しかし中断するのは口惜しいと柔らかな頬紅へ。

来るはずの衝撃に備えていたヒカリは、狙いがそれていることに声を上げずとも、非難の視線をコウキへと向けた。納得いかないとプルプルと震え、足先で脛先を小突く。

それがわざとじゃないことぐらい、彼の顔を見れば怒るよりも先におかしくなつて笑つてしまう。彼もまた、彼女に負けず劣らずの爆発寸前の顔で情けなくも縮こまっていた。

許されたのだと、そつと胸を撫で下ろすコウキ。どうやらこれ以上の延長戦はないものと考えて良いらしい。パタパタと片方が、手のひらで顔を仰いだ。そんな幸せ空間を、取り巻き達が許さないと知らずに……。

じつくりとだが確実に、ヒカリの取り巻きは目的を達成しつつあった。

暴走しつつあるヒカリの愛。彼女らは異性との交際において、上手くいく方法を知らない。知っているならせひとも教えて欲しいくらいだ。しかしそれは裏を返せば、破滅へと向かう方法は熟知していることになる。

そのままなら、なんら心配する必要のない順調な男女の関係。その絶妙に保たれているバランスに、今日ついに終止符が打たれる。

「あ、そういえば。今日タセツナが図書室で女子と楽しそうに話してるのみたんだー」

会話の脈絡を無視した、平穏な日常に突如として落とされた隕石。本人はそれを故意でやっているが、火遊びを承知で楽しむように、轟々と火柱を音もなくあげるヒカリに引きつった笑みを浮かべた。

想像を超える効果じゃないかと、変形する口の端を犬歯で挟む。

そっからはもう、ダムが決壊するように早かった。

「その話詳しく聞かせて？」

瞳孔が開き切り、深みを増したりリツチブラックの黒目。眼前の相手を流れて殺さんばかりの冷え切った表情。血管が凍るような幻覚に襲われた張本人。成果物に笑みを浮かべることにもとうに忘れ、ただ頷きで同意を示す他なかった。

甘味

楽しかった。

コウキと過ごす日々全てが、私を形作った。

だから、いつしか主従の関係は対等になることを望み。平凡でみすぼらしいと感じていた下位層の生活も、彼となら楽しくやっつけていく。そんな考えの変化すらあった。

高飛車と万能感に支配されていた私が、意気揚々と料理を作り失敗すれば、それでもコウキは完食してくれた。ゴミ箱に放り込もうとしていた黒い物体を、美味しい美味しいと食べるコウキに、さすがの私でもお世辞であることがわかった。

今この現状に甘えていたら、いつかコウキが私を見限ってしまうのでは？ そんなことを考え始めたら、彼が一生憧れ慕い、そして愛し続ける女になろうとの決意に至る。

我が儘の癖は心に誓って押さえ込んだ。料理は専属のシェフから直接学んだ。勉強も、スポーツも、成績に関することは極地まで突き詰めた自信がある。辛くなかったかと問われれば、もちろん辛いに決まってる。それでも、コウキが私を真に褒め称え尊重し敬愛し恋い焦がれるたったそれだけで、犬のように従順になれる。

しかし、そんな生活にもいつしか影が差すように……。

「コウキ君って素敵な人だよね〜」

彼もまた私に並び立つために努力を重ね、そんな姿を微笑ましく思いながらも、この言葉に背筋が凍った。

コウキの魅力に、果たして他の女子が放っておくのだろうか？ コウキの心の内その全てを把握することはできない。悪魔の証明に近いその愛を確かめるために、気が付けば私はコウキに詰め寄っていた。

始めは互いのキモチを推し量るべく始まった行動も、次第に女子へ

の牽制も兼ねた過激なものへと姿を変えていく。

彼の隣に収まるためと、眠っていたハズの本性は次第に解放され、そんな凶暴すぎる欲望の数々に、コウキは無言無言に答えてくれる。いままで積み上げてきた信頼を通貨に、表面上だけのやりとりで束の間の安堵を買う。違和感はやがて麻痺し、すっかりその行為の依存症になっていた。

キツく当たりさえするものの、それはコウキが私を決して裏切らない、そんな絶対的な自信の現れ。しかし、取り巻き達からもたらされる情報の数々が、その絶対性を欠くように端々を侵食する。

コウキの女友達を目の仇にした。ふと襲われる不安から、両親に頼んで許嫁の契約を結んでもらった。コウキの行動を制限し、拘束するようになつた。コウキに悪い事をしている罪悪感は薄い。本当に私のことを愛しているのなら、むしろ喜んでよ!! と叫び出すかもしれない。

二人三脚で歩んできた道は、いつしか片方が暴走し、片方が合わせよう合わせようと努力するだけ、躓いた時には手痛い代償を払うこととなる。

病床に伏せ、お昼はコウキが作ってくれたカレーを食べて、彼が看病のために残ってくれなかつた事実を慰める。

まだコウキが帰ってくるまで四時間ほどある。とてもじゃないが、黙って待っていらられるほど私は良い子じゃない。昼休みであろう時間帯を今一度確かめ、彼へ連絡を入れた。

しばらく画面を見つめていると返信が来て、頬が緩んだ。ほら、別に私に愛想を尽かしたわけじゃないんだ。そうやってまた自分を慰め、早く帰ってくるように命令口調で文字を打ち込む。それに、なんだか曖昧な語尾で返信がきて、もう一度催促しようと文字を打ち込む

だが、昼休みが終わる節の連絡を最後に画面に動きは無くなった。

スマホをソファアヘ向かって投げ捨てる。ポスツと私の気持ちみ
たいに音を発するのも見送らず、私はコウキの思い出を胸に抱き、
ベットに潜り込んだ。コウキといると、スキップするように進む時の
流れも、この時ばかりはイラつくほどに緩やかだ。

一眠りしようと体を丸める。けれども、結局眠りにつくことも出来
ずに、玄関で彼の帰りを健気に待つのだった。

何度見てもドアに変化はない。携帯を弄る頻度は時間と比例して
回数が増える。プルプルと、それは怒りか心配か禁断症状なのかわか
らない手の震え。返信のないメッセージは二桁を優に超え、間も無く
三桁の大台を記録しそうだ。

ブルリと悪寒が体を駆け巡る。落ちついていたはずの風邪が復活
したのかもしれない。けれども頑なにその場を動かず、スマホの画面
を食い入るようにつめ、目を血走るのに忙しかった。

そこに一件の通知音。全ての動作が止まって、頭も呼吸おも停止す
る。そこにはただ一言「ごめん、電源切れてた」。こんな時間まで
帰ってこないで、それでもこの下手糞な言い訳を信じる女はこの世に
絶対に、絶対にいない。いたらそいつは頭がおかしイ。

怒髪天を衝く。栓を抜いたシャンパンのコルクなんて生優しいも
のじゃない。溜まりに溜まったドロドロが、カウントダウンも待たず
に発射する。

「ごめんヒカリ！ 遅く……なっちゃった」

鬼電ならぬ鬼コールで鳴り止まないスマホをバックに仕舞い込む。

ヒカリの寝室に届くように開口一番大声を出す、靴を脱ごうと視
線を下げる先にヒカリが寝っ転がってこちらを見ている。”ゴツホ
ゴツホ”と咳き込みながらも変わらぬ睨みを利かせ続ける様が、お前

のせいでこうなったんだぞと言いたげだった。

手を貸そうと伸ばした腕は振り払われ、ユラリとホラーのように立ち上がったヒカリは逆に怖くなる落ち着き払った声で喋り始める。

「思い出したようにさつき連絡入ったけど、何してたの?」

「先生に呼び止められちゃっ」どの先生? ……黙らないでよ、明日確認取るんだから」

「……」

「なんで何にも言わないの? 今まで何してたのか説明することができないわけ? それとも言えない事情でもあるの? ……まさかとは思うけど、私がないからってあの芋メガネと会ってたんじゃないでしょうね?」

「いや……」

凶星を突かれて言葉を見失う。こういうところばかりは女性には勝てない。さつきまで楽しかった頭を酷使して、なんとか言い訳を捻り出す。

「ほら! 数学の先生今日が離任式だったでしょ? あんまり関わりなかったけど、成績がよかったからかな……ちよつとだけ盛り上がっちゃって」

「ふーん。……今から電話するから」

「ちよ、ちよつと待ってよヒカリ!」

「なに大声出してんの、白状するまで問い詰めてやるッ」

「…………ごめん」

「私は別に謝って欲しいわけじゃないの。それはわかってるわよね？」

「…………ごめん」

「…………ねえ、私のこと揶揄ってるわけ？」

「…………ごめんってば」

「…………つまりコウキは、私が寝込んでいるのをいいことに、喋れないよ
うなことしてたんだ。私の目がなくなったら、これ幸いと私を裏切る
んだ。相手が誰かなんて問題じゃない…………絶対に許さないから」

もはや憧れの人の面影のない表情に、怖がるのが正解のはずなのに
スツと冷め切った気持ちで冷静さを取り戻す。

いまだかつてないほどの怒りように、いまだかつてない要求が突き
つけられるのは明白。根掘り葉掘り洗いざらいはほんの序章。日に
日に辛くなる毎日の、唯一といっていいほどの安らぎを奪われる辛さ
に比べたら、もう他のことなんてどうでもよくなってきた。

怒りはない。そこにあるのは長年の疲れと諦めと、呆れだった。

「もう…………疲れた」

「は？」

「ヒカリの相手するの疲れたよ」

「なにいつてんの？」

「もうこれ以上縛られたくない。ヒカリにも、父さんの会社にも……」

「なにを言い出すかと思えば、そんな身勝手な要求が簡単に通るわけ「さよなら」……ッ！」

「痛いよヒカリ。腕離してよ」

「うるさい、あんたは私の所有物なの。そんな勝手許さないからッ」

せつかくの獲物を逃すまいと必死になって爪を立てるヒカリは手を離してくれそうもない。後の結末が苦いことになりそうだが、ここははつきりと理由を述べ後腐れないようにしようと、ヒカリに腕を掴まれたまま口を開く。

「今日コカゲと会ってたんだ、前回のテストの成績が上がったからそのお祝いにつて。一時間で戻るつもりだった、ヒカリに言い訳できなくなるから。長い付き合いで、ヒカリの限度がその時間だぞと自分に言い聞かせてた。けど、その、……楽しかったんだ。僕のことを等身大で見てくれる彼女と一緒にいると、やけに時計の進みが早かった。時計が終わりを指し示すたびに、無理くり理由付けしてその場に居座ったよ。そしたらあつという間に二時間もオーバーしてて、いつの間にかヒカリのことがスツポリと頭から抜け落ちていることに気がついて心底ビツクリした。だから、このごめんはそんな意味を込めての、ごめん」

指はトントリズムを刻み、その独白をだまって聞いていたヒカリは、理解できないと首を傾げた。

「で？　なにがいたいわけ？」

「もうヒカリのことは、とつくの昔に好きじゃないんだ。……それ

じゃあ」

唯一聞き取れた”ソレジャア”の意味をヒカリが考えあぐねていると、コウキはもう心残りはないと、あっさりとマンションを立ち去る。

果物

新しい朝がきた、憂鬱の朝だ。

久々に戻った我が家。家族のおはようも、朝ごはんのいい匂いもそこにはなかった。ボロアパートの二階角部屋。けれども住めば都というのかな、久々によく眠れた気がする。

センベイ布団のおかげかブリキの人形のように起き上がりはぎこちないが、なにこんなの慣れたもの。宿泊先で目覚めたみたいに自分の居場所を見失うのは、それだけ自宅としての役目を負わせていないなよりの証拠。

学生の身分上、男女が同棲なんてしていることが学校にバレれば大騒ぎになる。いわばこの場所はペーパーカンパニー。ヒカリの御守りによってただの幽霊部屋となっていたところが、こんな形で日の目を浴びるなんて。

低血圧の頭がブドウ糖を求めて彷徨い歩く。けれども幽霊屋敷に電化製品は過ぎたる代物。現代の必需品ともいえる冷蔵庫は、コンセントに繋がれていないどころか部屋に存在すら許されていない。最低限の生活も過ごせないこの部屋は、一般文化人として落第点だろう。

コンビニでせっかく冷やされていたゼリー飲料は常温へと還り、それでも空腹からか凄まじい速度で腹に収まる。プハツと音を意図せず鳴らせば、朝食は十秒ももたずに終わりを迎えた。……ヒカリの部屋から荷造りもせず逃げ出したからか、持ち物はほとんど回収できていない。

ヒカリの選んだ服の類はそのまま放置。これは別に気にならない。問題は細々とした生活用品。パジャマだとか歯ブラシだとかタオルだとか細々したものを一から揃えるのは大変なので、ヒカリのうちから持ってきたいがそれは難しいだろう。

……そして、一番の懸念点がヒカリを怒らせてしまった報復が、いつ降りかかってくるのかと怯えるところだ。

あれだけ大見え切ったはいいが、その場の空気と勢いだけで行動したことが悔やまれる。もっと冷静に対応できなかったのか？ と自問自答を繰り返せば、一体どんな顔して学校に行けばいいんだと先が思いやられた。

……悩んでいても解決はしない。安全地帯から抜け出すのは勇気がいることだが、報復の対象がコカゲにもおよぶ可能性を想定すれば、うかうか腰をおろしてもいられないと制服を着込んだ。

教室に近づくとたびに、毒に隅々まで犯されるような気分だった。

妙な吐き気と、酷い動悸、おまけとばかりに息苦しい。体調不良のタイムセールかと気を紛らわせるが、すり足で重荷を支えるのがやつとだった。

いつもの空気だ、いつもの喧騒だ、けれども変に胸騒ぎ。しばし胸をさすって、酸っぱい口を唾液で流し、やっぱり耐え切れないと逃げ出したその先には……。

「タセツナくん大丈夫？」

「——プハア！ ハ、ハ、ハ、……ハア」

呼吸が止まった。心臓が跳ねた。何事もなく動き出した心臓と同じくして、つまりにつまった息は出口に向かって殺到する。ついで体は弛緩に移り、コカゲの顔を見きもちが和らぐ。ふだん声をかけられることなど稀なので、あまりにも少ない選択肢の一つが、異様に殺気だっていたのか。

改めてヒカリのことを恐ろしく思う気持ちを自覚し、不安からコカゲの体に抱きつきたくなる衝動に駆られたが、すんでのところで流行る気持ちを押さえ込む。こんな通行のど真ん中でのイチヤつきなど、周囲はおろかコカゲにさえ迷惑だ。不自然に浮いてしまった両手を誤魔化すように周囲を偵察し、メガネから覗いた心配そう目に笑いか

けた。

「あ、ごめん。もしかして迷惑だった？」

「いや！ そんなこと！ ちよつと気が立ってただけだから。うん、もう大丈夫」

また意図せずに大きな声を出してしまったと口をモゴモゴとさせ、ワタワタと手を慌てふためかせるのがおかしかったのか、コカゲは苦く笑って”本当に大丈夫？”と再び問いかけた。それに、”本当に、大丈夫だよ”と照れまじりに応えようと、さっきまでの気持ち悪さは多少紛れる。

それでもいつもの様子との違いを感じ取り、コカゲはクルクルクンクンと犬のように僕を中心にまわり始めた。ああ、コカゲのこんな一面がみられるのなら、体調不良も悪くはないかなと甘い感想を頭に浮かべる。

可憐で、それでいて愛おしいような視線をコカゲに送れば、取り付いてポカポカと打撃が加わった。

「私たちの仲じゃん！ 隠し事はナシだよ！」

”いまさつきまで気分が優れなかったけど、コカゲに会えたから気が紛れたよ。ありがとう”……とは恥ずかしくていえるはずもなく、けれども彼女との時間を長く取りたくて、この状況に甘んじることにした。

キヤ

ヒカリサンモアクジヨデスヨネ――

エーヤダーオニアイ――

「なんだか騒がしいね」

「うん。……うちのクラスからだ」

始業前の喧騒をたやすく両断するその声は、特徴的な甲高さも相待って、廊下の雑踏のなかでもたやすく音を届けた。気になる様子で漕ぎ出したコカゲを次の瞬間には追い抜いて、毒味をするような面持ちで盛り上がるのその原因を視界に収める。

「そ、そう？ 変じゃないかしら？」

「全然おかしくないですよヒカリさん。むしろ、振ってやったコウキが未練も残せないようなベストカップルですよ」

「へ、へへ」

そういつて腰に回された手にビクツとしながらも、ふだん人前で見せないようなしおらしい態度で、ヒカリはぎこちない笑みを浮かべる。その相手は、学校で一位二位を争うような運動部の男子。こちらも普段とのギャップに苦しんでいるのか、その色男ぶりは鳴りを潜めていた。

おめでたいことのように大袈裟に手を叩きながら、輪で囲む取り巻き達の顔には笑顔が張り付いたように楽しげだった。昨日今日の間は何があつたのかを正確に推し量ることはできないが、ヒカリの束縛から解放された福音が鳴り響く。

「いいの？ ヒカリさん……」

「うん。……肩の荷がやっと降りたよ」

けつきよく、僕の役目はペット程度の憐れなモノで、ヒカリが飽きてしまったから捨てられたに過ぎないんだ。気の迷いのような許嫁

の話も、向こうが是非もなく白紙に戻すだろう。これでいいんだ。昔のような憧れの存在であったのならまだわからないが、今ではそんな気も失せている。

互いに新しいスタートを切る。父の会社は倒産まで追い込まれるだろう。けれども、イツトキ家からの本格的な報復がないだけまだマシ。こうやってコカゲとお昼の約束を取り付けられるのも、待望の日常がようやく芽吹く、そんな冬の時代を乗り越えた確かな証なのだから。

コカゲと教室の前で別れたのち、いまだに盛り上がりを見せる教室へと堂々と足を踏み入れた。クラスは新たなカツプルの誕生に浮かれ、僕が入ってきたことなんか眼中にもないご様子だ。そうやって自分の席に腰を下ろす手前、ふと何気なく視線を預けたのは盛り上がりの発起点。

ヒカリと視線が重なった。

誰も自分のことになって意識にも上がっていないだろうと高を括っていただけに、台風の目であるヒカリと目があつたことに呼吸が凍る。

「おいタセツナ。お前、フラれたんだってな？」

「え、あ、うん」

「なんだよ、まだ未練あるのか？」

「いやそんなこと……」

突然話しかけてきたクラスメイト。特にこれといって親しくした覚えはなかったが、僕がヒカリにフラれたそんな同情心が手伝ってか、気軽に声をかけられたのだった。

どちらかといえば、むしろフットしたのはコツチだろうというツツコミをグツと堪え。体裁やメンツを気にするヒカリの言動を尊重すれば、

むしろこの方が都合がいいとの判断にいたる。

そして先ほど中断された視線の行方をそれとなく探せば、そんなものどつくに消え失せてた。当たり前だ、もう僕の役目は終わったんだ。なにを自惚れているんだ。そう心のうちで唱え、なおも”ミレン、ミレン”とうそぶく厄介ものの対処に移るのだった。

「お待ちせよカゲ」

「ううん。私もさつき来たばかりだから」

「いい場所だね」

「えへへ♪ そりやもう私のもっとおきだから」

お昼休み。購買ダツシユのちに中庭のベンチへと急げば、コカゲは太陽からほどよく隠れた緑陰の中にいた。

強い日差しに手を掲げ、立ち竦んだ僕に手招きして彼女が誘う。この時間帯の太陽は真上から降り注ぐため、なかなか涼しさと暖かさ、その調整は至難の技。こんな好条件の場所、競合もさぞ多いだろうに。『とっておき』そんな彼女との秘密を共有するような文言に、えらく心はかき乱された。

「購買こんでた？」

「あ、あーうん。殺伐としてたよ」

「いつもはお弁当だもんね？」

利き手に握られた最安値の菓子パンを見てコカゲがいった。久々の購買はまさに戦場。うなぎの餌やりとも形容し難いその光景を思い出し、おしくらまんじゅうが可愛く見えるその生存競争に、今この

場でも体の温度が上がってしまう気さえするのだった。敗者の烙印とも取れる菓子パンにため息。せつかくの解放記念日には質素な昼食になりそうだな。と一人考えを巡らせる。

「ほらほら早く食べちゃおうよ」

「そうだね」

小さな風呂敷を広げたコカゲ。中からは可愛らしいミニサイズのお弁当箱が。成り行きで小さな菓子パンになってしまった自分と違って、コカゲの場合これが普段通りなんだろう。

それでもやはり、”それで足りるの？”とつい言ってしまうそうになるのは許してほしい。健康を通り越した、過剰なダイエットが横行している現代において、なにも責められるほどすつとんきよんな発言ではないはずだ。お弁当を開けたコカゲにならうように、小さな包装を解いた。

「お一つどうぞ」

「え？ い、いや悪いよ」

袋から覗く菓子パンに食いつこうとした矢先、先端に卵焼きを串刺した、可愛らしいピンク色のピックが接近してくる。ホレホレと左右に揺さぶりをかけながら、ニヤニヤと挑発するような蠱惑的な笑み。目の前にぶら下げられた卵焼きに食らいつきたい欲求を、弁当に空いたスペースの重大さで押さえ込んで、弱々しい否定的な言葉が飛び出した。

”そっかー”と引つ込む卵焼きに名残惜しげに声が出漏れてしまえば、”……男の子はそれだけじゃ足りないんじゃない？”と心配されてしまう。それは僕が言うか言うまいか悩んだセリフによく似ていた。けれども、「備え膳食わねば男の恥」ともいう……使い方これ

であってるよね？

「……ありがたくいただきます」

「ソフフ。どうぞ召し上がれ」

ピックの主導権がコカゲにある現状。これは食べさせてくれるということでいいのだろうか？ いやでもしかし、ただの思い上がりだった場合、痛いくらいに恥ずかしいことになる。さっきの挑発的に見えた笑みも、もしかしたら何か企んでいる顔だったりして。

……いけないな、ひどく人間不信だ。交友関係は極々狭く、唯一の繋がりだったものもニセモノだったのだと確信した今、思えばひどく心は傷ついていたのかもしれない。

このイベントがただの男女間の戯れの域を大きく超えていることに気が付く。長年しばらくいられていた古い自分を捨て、いまから新しい人生を送る自分へ脱皮する。そんな重大な局面なのだ、と。一步、ただ一步ふみ締める。人生を捧げてきた光のもとから、静かに佇む木陰のなかへと。

「？　もしかして、どこか具合……」

「いや、そんなんじゃないよ。それよりも……コカゲ」

「はへ？　あ、は、はい」

「いくよ」

「!?　ど、どうぞ」

僕にピックを差し出したつきり動かなくなったからだろうか。コカゲは今朝のことを加味してか、体調を心配してきてくれた。それに

対してすぐさま否定をぶつけ、熱く視線を送って手を握る。ワントンポ遅れて顔を紅潮させたコカゲは、抵抗する意志もなくなにかに肯く。その領きを僕の肯定と前向きに捉え、合図を送る。コカゲはなおのこと驚愕を大きくする。が、それでも僕のことを許してくれた。さあ、いけ。舞台は整えた。僕に枯れかけた人生を後悔さえないでくれ。後は、一步踏み出すのみ。

「どう？ しつかり出来てる？」

ガリッ

「……うん、完璧だ」

「なんか卵焼きからは絶対しない音が聞こえるけど……」

「いや？ 気のせいじゃないかな？」

初動がもつともエネルギーを使うのと同様に、飛び出してしまえば大したことない。……なんてことは結構ある。ドラマティックは境目の一瞬。それを過ぎてしまえば、不思議な高揚感はそのくさと荷造りを終えた。そうして、異音の元をウグツツと飲み込む。この小さいながら噛み寄せるたびに口内に響く歯応えは……卵の殻入りの卵焼きか。……カルシウムとれて良い感じだな！（脳死）

なに、どこぞのお嬢様もはじめはハマしていたんだ。コカゲの方が普通に食事できる分、上達もそれだけ早くなるだろう。そうやって、もうまんたいとコカゲに笑いかける。

「卵焼きから変な音が出るとか、あり得ないから」

「ヒ、ヒカリさん……」

新しく生まれ変わったはずの僕は、せつかく破った殻の中に再び閉じこもった。『人はそんな簡単に変わることはできない』誰かがいつていた言葉を痛感する、一生モノの体験となった。ヒク、イット……。彼女は突如として現れると、下卑た笑みをこちらに向けてくる。怯えるようなコカゲの声。僕は目を伏せるので精一杯。

「あーあーみすばらしい食事なこと。いつも食べてたお弁当はどうしたのかな〜?」

「……」

「てかき、卵焼きをミスするのかなんなの？ 基礎中の基礎も出来ないじゃん」

言葉が降りかかってくる。僕はなにも言い返せず。次いでコカゲに矛先が移ると、不覚にも安堵してしまう自分がいた。自己嫌悪を抱けば、殻に逃げ帰った僕を殴り起こし、急造仕立てで元主人に噛みつきにかかる。

「……お前、そういうのやめろよ」

「は?」

「悪い癖だぞ、それ」

「なにコウキ、高説を垂れるだけ自分はエライとかスゴイとか思っちゃってるわけ? ナニ様?」

「もう終わったことだろ。……今後、僕たちに二度と関わらないでくれ。頼むから」

「泣いて謝って、ごめんなさいヒカリ様！ 僕が間違っていました！
つていえたら考えてあげる」

「出てけよ本当に」

「ッ!? ずいぶん生意気になったみたいね。かりそめの自由はそんなに楽しい?」

「会話になってないよ。いこうコカゲ、せつかくの昼食が台無しだ」

いまだに怯んでいるコカゲの手を握り、過去の象徴をひどく睨みつけた。それに彼女はいつしゅん驚いたように身を縮こませ、こちらも負けじと睥睨を返されたが、そんな刺激を真正面から受ける道理もなくそそくさとその場を後にする。

「あーあー辛気臭いのがいなくなってせいせいするわー」

コカゲがとっておきの場所といった所は彼女に占拠され、勝利の余韻に浸るようにあからさまな大声でそう口に出す。僕は、そんな後ろから届く声に、自分の不甲斐なさを呪うのだった。

結論をからいえば僕の日常はひどく。いや、もしかしたら前よりもっと悲惨なことになっていた。もはや僕の存在などそこらへんの石ころと同等か、それ以下かと勝手に決め込んでいたが、彼女からすれば新しく誓約したカップルの会合より重要なことらしい。

毎日二、三度は突つかかってくる。

取り巻きを引き連れ、こちらを下に見て挑発するような態度。

特に、コカゲという時間は執念に近い恐ろしいものを感じた。

彼女の口にしていたかりそめの自由とは、実を射ていた表現だったようだ。ああ、こういう形での復讐なのかと素直に納得さえし

てしまう。過去の自分が顔を出すたび、氷像にされて幽閉されて『お前は一生わたしのおもちやだ!!』と彼女に叩きつけられている気がしてならなかった。

コカゲに大丈夫かと問いかけて、大丈夫と返し。落ち込んだ僕をコカゲが励まして、こちらにも元気付けて。……これでは単なる傷の舐め合いではないか。

縁が切れても、まだ。まだ僕のことを彼女は縛りつづける。毎日、毎日のように通り過ぎる嵐に固く身を丸め、ストレスでおかしくなっ
てしまいそうな頭に天命が下った。

もう耐え切れない。

僕と彼女をつなぐ全てを、断ち切る。

コーヒー

「まさかコウキから部屋に行きたいなんてお願いされるとはね〜」

「……」

ニヤニヤと、ニタニタと。ここ最近でもっとも愉快だったコウキの謝罪をリフレクトさせる。今日が『偶然にも』私の誕生日であることも合わさって、浮かれずにはいられない。彼のことを目撃した第三者は、屠畜前の肉牛のようだと感想を抱くだろう。

誕生日が刻一刻と近づきつつあったので、少しばかり無理して圧をかけたのが正解だったのかも知れない。意地の悪い冗談をかけられ流石の私でも少々堪えたのだ、ここまでは「おあいこ」である。

「無様だったわよ？　あなたの懇願する姿」

「……」

「フフ、本当に愉快だった。泣いて謝ってないのはちよつとだけ気に食わなかったけど」

「……」

いつもに戻る、久方ぶりの放課後。ここまでも、そしてこれからも私が主導権を握る。矢継ぎ早に溢れ出る言葉を形にするが、なおもコウキは反応するのを拒んだ。

それが、男の尊厳を踏みにじったことに対するささやかな抵抗なのだとても主張したいのか、クマが浮かぶ不健康な顔を俯かせて不摂生を演じて見せていた。

「あ！ そうそう。昨日はハンバーグだったんだよ？ もう少し早く声かけてくれたら食べられたんだけどな」

「……」

「どうするの？ 今日は泊まってく？」

「……」

「……ねえ、なんとかいいなさいよ」

地獄の釜が煮たつたような、自分でも驚くような低音が声帯を震わせる。相変わらず反応の鈍いコウキは、ようやくと硬く閉ざされた唇を持ち上げた。

「……早く上がらせてくれないか？」

「べ、べつに」上がるな、なんて一言もいってないでしょ？ さっきっからなんで黙ってるのか聞いているの」

「……体調が悪いんだ」

「それはコウキの振る舞いが悪いからよ」

ストレスを意図して加えたのだもの、当然だ。これでも長く付き添っている。誰よりも自分のことを愛してほしいと願うのなら、相手の好みはもちろん、どんなことが嫌なのかも正確に把握しておかなければ立ち行かなくなる。

荒んだ記憶を掘り起こしてみれば、流石の私でも顔を顰めるくらいに精神的に追い詰めていたことは認めよう。それでも、私に対する裏切り行為に対する制裁と考えれば、可愛い範囲でまだ収まる。

「……」

「さ、ついたわよ」

「はやくいこう」

「ちよ、ちよつとなんなのさつきから急かして。なにか企んでるんじゃないでしょうねえ?」

「そんなことないよ」

「ふくん。なにもないなら……寂しいけれど」

小さい声ながらも、呆気なく漏れ出てしまった感情の吐露に”しまった”と口元をつぐんだ。聞こえないでほしいと願う傍、聞こえてほしいと矛盾した気持ちの存在に気づき、私の意を汲んで欲しいと強請るような視線をコウキに向けてみる。

しかし、当の本人は聞いているのかいないのか上の空で。ここではないどこかの風景を眺めているように、目の前にいながらマジックミラー越しに見つめているような幻覚に襲われた。それでも自分の元に戻ってきてくれたのだから、二人が離れていた時間を急いで精算するように腕を絡ませ、彼に寄り添って体重を預けるのだった。

「並んで歩くのも久しぶりね」

「……そうだね」

「それで?」

「?」

「な、何か渡すものとかないの?」

狙っていたとはいえ、この日に謝罪を申し込んだ罪は深い。毎年必ずプレゼントを欠かさなかったコウキが、なんの考えもなしに私の前に姿を現すはずなんて有り得ない。

そんな確信めいた願望が脳内で確立し、全然興味ありませんよーとコウキから顔を外して、さっさと寄越しなさいと手の平で催促する。視界から外した手の感覚に、何かしらの重さが乗るのを期待して。

「生憎と、今日は持ち合わせがないよ」

「ち、違うわよバカ! なんでわざわざ今日きたのよ!」

「……あー、ごめん。それどころじゃなかったから」

「……そう。……まあでもいいわ。特別に、許したげる」

そういえばと、まるでお使いのついでのように思い出された今日の日付の意味。要求していた手は、拳を握って小さく震えた。

……さっきまでの哀れな謝罪で有頂天になっていなかったら、危うく感情が爆発するところだった。せっかくなかなかいい気分であれば、危うく過ぎていたのに、感情の振り子は大きく触れ直し、最終的に中立に落ち着く。

冷静になった頭で考え、それなら自分の願いを聞き入れてもらえるチャンスだとポジティブに。さてどんな願いを聞き入れてもらうか、一生忘れられない特別な日にしてもらわないと。

「おじやまします」

「なんなのその他人行儀」

「今日はヒカリに大事な話があつてきたんだ」

「へ、へ〜そうなんだ」

期待感を喪失し、静まり返ったいたはずの水面が大きくうねり出す。プレゼントはお預けで気落ちしていたが、コウキの放った大事な話の文言に、胸はときめかずにはいられない。許嫁で、両思いの関係でこそあるが、正式なプロポーズを面と向かつて受け取ったことはいまだになかった。

こ、こここれは今日がその日になるんじゃないかと妄想は膨らみ、心臓がゾクゾクと脈打ち始める。自分を落ち着かせるよう仕切に腕をさすって、次の言葉を一語一句聞き逃さんと耳を澄ませ、湧き立つ心に引つ張られそうになっている頬を表情筋で押さえ込む。

「……絶縁してくれないか」

「ダーメ♡」

「そういうと思ったよ」

押さえ込んでいた表情は声を出すために解放され、本当なら激怒してもおかしくないはずなのに、変な笑顔と声色で否定を示す。やっぱりなど言いたげに諦めてため息をつき、伏し目になったコウキを無表情で眺める。

……一体、いつまでそんな冗談をほざいているんだろう。まだ反抗心があるのかと、まだ調教が足りなかったのかなと首を傾げた。すると、暫しのあいだ押し黙っていたはずのコウキが突如動き出す。不思議に思つてその後ろ姿に声をかけたが無視され、語気を荒げた第二波を繰り出す寸前で、止まる。

いつの間にか取り出していたゴミ袋片手に、コウキはせつせと作業

を始めていた。

「ちょ……なにしてるの?」

「……」

「ねえ、ちょっと聞いているの!」

「……」

「無視するな!!」

「……」

淡々と作業するコウキに不気味さを感じ、背中を掴んで前後に揺らす。けれども動きは止まってくれない。ふと作業の先に目を向けると気がつく。コウキの私物が片っ端からゴミ袋の中に消えていく。その行為が、まるで私の世界から永遠に消え去るための荷物整理に見えた。

「今すぐやめて!」

「……」

「やめなさい!」

「……」

「ちょっと……」

「……」

「いい加減にしてよ!!」

必死の叫びも彼には届かない。出家直前の最後の身支度のよう、その動きは淡々と淀みなかった。このまま何も言わなければ、彼は私の目の前から煙のように何処かへ消えていってしまう。そんな悪い方向への想像を必死に吹き飛ばそうとして叫ぶ。けれども返事は帰ってこない。

応答がない時間が間延びすればするだけ不安は募る。目の前に相手はいるはずなのに、二人の時間軸がねじ曲がっているような違和感が、強烈な不快感を絶えず生んだ。一連の動作が紡ぐ生活音が、私から理想の日常をねじ切っていく。もうここは用済みと振り返ったコウキの胸に一振り。叩いて、殴って、必死にこの場に止めようと凄む。ナイトに裏切られた姫君なんて、いかにも創作のネタになりそうな結末は、あまりにもつまらない直球ストレート。ただ期待して、ただ裏切られて、ただ絶望するだけのものはや陳腐。

「あんたがその気なら私にも考えがある!!」

「……」

「タセツナ社は潰す！ 莫大な借金を負わせて破産させてやる!!」

「……」

場所を移して今度はリビングへ。何事もないように淡々と作業を繰り返すコウキに叫ぶ。もはや対等な関係どころかいつている場合じゃない。自分の持っている手札を惜しげもなくぶち撒ける段階に移った。どんな手を用いたとしても、目の前の彼を繋ぎ止めないと……。

「許婚の話も白紙に戻すから！ 恩赦なんて生温いものはないからね！！」

「……」

「あんたの進学先、就職先にも手を回しておくから！！ 人間の暮らしができると思わないことね！！」

「……」

「ツツツ!!」

ムキになってばら撒かれたカードを向こうは容赦無くつつばねた。いや、コウキにとってはただ眼中に入りすらないのか、はたまた勝負のテーブルにさえついていないのかも知れない。

庇護下である親の会社はちり紙以下だと宣言し、コウキの人生は先真つ暗だと忠告してやり、私と一緒にいられなくなる条件にもピクリとも反応を示さない。打つ手なしと、しばらく後片付けする背中を悶々と睨みつけていると、コウキはリビングでの作業を終える。次に向かう先は……。

「だ、ダメ」

声をかけると同時に扉は開かれた。望みもしない弱々しい声が飛び出す。そこは、コウキと喧嘩別れした日からいっこうに片付けられていない、私の弱みが剥き出しになった場所だ。

「……」

「やめて、コウキ。お願いだから」

袖を引つ張りながら視界を別の場所へ移そうと、部屋から締め出そうとするが、コウキの視線は床一面に散らかった数々の思い出に固定される。コウキの私物にプレゼントは含まれるのだろうかと高速で考えは巡り、そうは思いたくないが十分考えられると、なおのこと強く体を密着させて主張を強める。

見上げれば冷たい無機物でも見つめているような視線に、最悪の未来を想像した。そこでようやく、禁府ともいえるジョーカーの存在を思い出す。

「コカゲ!!」

「ッ!」

あれだけ無視を決め込んでいたのに、たった一言で相手の牙城を打ち破れたことで、えも言われぬ笑みが溢れる。コウキの手元が止まった。こちらの出方を伺っているようだ。

思い出がたくさん詰まった物品を危機から救えたことと、一時の勝利に緩んだ頬を引き締めて、次の一手を素早く並列計算する。一度は崩れかけた優位性を再び確保すべく、行動を起こすのだ。慎重に、私のもとで未来永劫、永久永続的に縛り上げなければ。

「さっきまで言葉は全て撤回するわ……代わりに彼女の人生で償ってもらいましょうガッ!!」

言い終わる直前、胸ぐらを掴まれベッドへ放り込まれた。舌を噛んでしまったことと、いままで守護していたはずの剣が牙を剥いたことにショックを受けたじろぐ。

抵抗する時間はなかった。”なにすんのよ!!”と訴えてやろうと沈み込んだ体を起こせば、一層のこと深く沈み込んだベッドの張り付けに。飛びかかって来たコウキは今にも飛び降り自殺してしまいそうな、崖っぷちに追い詰められたような表情を浮かべながら、襟首

を掴んで顔を寄せてくる。

「お願いだから。もう、僕の人生に、干渉してこないでくれ」

「……フンツ、いやに決まってるでしょ！」

「……僕がヒカリにあげたやつ、ちゃんと取ってあるんだね」

「ツ!? ……も、物置から出て来ちゃってね? どう処分するか悩んでいたところよ」

あと数センチでキスしてしまいそうなほど近づく顔と、見方によってはベッドに押し倒されたとも解釈できるこの状況に心臓は早鐘を打つ。それはコウキが積極的に詰め寄って来てくれた嬉しさと、このまま私に危害を加えるんじゃないかとの恐怖の感情が、危ない興奮を紡ぎ出している音だ。

熱を帯びたのかと思えば寒気を走らせたり、複雑な感情は言動の一貫性すら危うくさせる。ご丁寧にコウキからのプレゼントが勢揃いしていることに、若干無理のある言い訳を絞り出し回答を返せば、事態は最悪の方向に進み始めた。

「そうなんだ。……じゃあ代わりに僕が処理してあげるよ」

「え?」

そういつて胸ぐらを寄せていた手を離し、床に開け放たれたまま放置されていたアルバムの一ページを力任せに引き裂いた。

「あ……」

ハラリと舞えば、ストーンと落ちる。笑顔で埋め尽くされていた唯一

無二の思い出は、無残にも可燃ゴミに成り下がった。アルバムから切り離された写真をコウキは遠慮なく足蹴にする。まるで、積年の恨みをいま晴らさんと息巻いているようだった。

白い亀裂が走った私だけになった写真が、いま自分の置かれている現状を克明に映し出す。

「……やい」

「？」

「やめて、ください」

プルプルと震えながら、ユラユラとベットから立ち上がる影。丁寧な口調でプライドすら大安売り。なんてことない二人の写真も、特別な瞬間の二人の写真も、私にとって見れば変えがたい宝物だ。つい最近まで見返していたであろう根拠は、開いた状態で放置されていることからお察し。余計に思い入れが強くなっているであろうアルバムの、これ以上の欠損を防ぐため下手に出る。

ガ、ビビリ、ビ。

返事は次のページを破く音であった。

「やめなさいっていつてるでしょ!!」

三ページ目に手を掛けたのを見て遂に堪忍ん袋の尾が切れた。次には破かんとする腕を右手で、愛おしくも痛々しい姿になったアルバムを左手で。何かの拍子に零れ落ちてしまいそうな潤んだ瞳でコウキを睨みつけ、より力を出すためなのか、悩ましくもウンウン唸りを効かせて力を振り絞ろうとする。結果は始めから知れたこと。アルバムを引き裂くはずの手は拘束を振り払うのに一度つかわれ、再び

ベッドへと突き飛ばして返す手で、悠々自適と力いっぱいに破り捨てる。

ストン

ベッドに沈み込んだ振動で、ボヤけていた視界は和らぐ。ツート線を引く液体に手を伸ばし、ネバネバと指に絡みつく感覚にしばしの現実逃避。あれ？ と首を傾げ、なんで泣いてるの？ と他人事のように考えたが最後、こんな弱くて脆い虚構の存在を覆い隠そうと顔を両手で覆い、スンスンと静かに泣き出すのだった。

真つ暗になった視界でも、部屋で暴れ回る何者かの姿がコンコンと心臓を突く。少しでもダメージを和らげようと硬く閉ざしていた視界に変わり、今度は耳を塞いで平静を装うが、断発的に鳴り響く音のレパートリーに苦しげに嗚咽を紛らせるのだった。

永遠とも取れる地獄のような責め苦はようやく止んだ頃。音が止み、赤く腫らしたまなこをゆっくり開けたヒカりは、部屋いっぱいを満たしていた思い出が跡形もなく消え去っている惨状を見て言葉を失う。ポーとなにもない床を見つめ、疲れたように目頭を擦った。

「これで全部？」

「見ればわかるでしょ……」

空箱となった白いチェストを覗き込んで、さもありがちに思い出を処分しにかかる。セキュリティをかけずに部屋を放置していた自業自得に変わりはないが、この気迫ならばチェストを破壊してでもこじ開けに来ただろうな、と妙に客観的意見が頭に浮かんだ。

コウキはここも用済みかとチェストを閉じ、振り返って次の場所に移ろうと回る背中を途中で止める。視線は、机へと向いていた。

「あの本は？」

「……ヒツ!？」

絵本に近づくコウキを確認して、ナイフを喉元に突きつけられた気分だった。もうとつくに処理されているものと思いついていた物品は、辛くも残酷にもいまの今まで生き残り、その御神体をいつもの背景に溶け込ませている。しかし、気まぐれな運命イタズラはいつだって残酷で、背けられない現実をヒカリの眼前で破裂させることを望んでいるようだ。

ワナワナと震える手で本を守ろうと手を伸ばす。そんなもの無駄だとわかっているのに、わざわざ自分の無力さを実感したいがためとも取られかねない無様な行動を取らずにはいられなかった。黒歴史を直視するように痛々しい表情で表紙を眺めるコウキ。二人の思い出を汚しかねないそんな視線を遮ろうと、叫ぶ。

「もういいでしょ!?! 嫌がらせのつもりなら十分果たしたじゃん!! これ以上私をいじめて何が楽しいの!?!」

「……少なくとも、ヒカリは好き放題振る舞ってて楽しそうだったよ?」

「楽しい訳ないじゃん!! 毎日毎日コウキのことで頭がいっぱいで不安だったんだよ!?!」

「……一度でも僕に相談してくれたことあった？」

「だって、そんなこと……」

いつもの尊大な態度はいずこに。ただただ体を縮こまらせて、怯えたように震えた私は、一体どんな目で見られているのだろう。

強欲な女だと思われるのだろうか。意固地な奴だと思われるのだろうか。気が付くキツカケさえあれば、私のことを嫌いになる要素が積み上がっていることに理解が及び、吐きそうになる。彼だけは、コウキだけは特別なんだと、終始甘えることしか考えてなかったんだ。

「これは……預かっておくよ」

「い、いや。返して」

飛びつきたくなる衝動を堪え、その場に歯がみして止まる。力づくではさつきと同じ結果になるだけ。だが、手をこまねいているとコウキも何もかも私という存在から引き剥がされてしまう。

私が生きる人生の、ほとんどの意味を失っちゃう……。それだけは、それだけはなんとしても避けなければ。罪悪感で繋ぎ止めよう。自分にも責任があったと自覚してくれば、きつとまた笑顔でスタートを切れるはずだから。自分のことを一旦棚に上げ、それらしい言い訳で鎖を繋ぐ。

「だったらコウキだっておかしいよ！ どうして怒らなかったの！ コウキがいつてくれないから、てつきり私の気持ちを察してくれているとばかり……」

「うん、そうだね。僕も悪かったんだと思う」

「そ、そうよ。どっちもいけなかったのよね!？」

「だからさ、双方に非があったってことだからさ……。もう僕たちの関係は終わりにして、また真っ新たな状態からそれぞれの人生を生きよ

うよ」

「は?」

この流れは仲直りする流れだろうが。どうしてそんな理論がまかり通る? なんで安易にリセットボタンに手を伸ばすの? 私たちは両思いのはず。なのになんで離れないといけないわけ? 何が気に入くないの? 私が生意気だから? だからコウキが望むなら直すって言っただけじゃん。

「私もコウキのこと好きなんだよ? コウキも私のことが大好き。だったら離れるなんておかしいじゃん」

「……もう終わったんだよ、ヒカリ」

「終わってない! 終わってないの!! どうしてそんな酷いこと言えるの!? あの芋女にそう言えって命令されたんでしょ? ねえそうなんですよ!? そうっていつてよお願いだから!!」

「何もかも手遅れなんだよ、どうしようもない」

「わかった! アイツが邪魔なんですよ!? 大丈夫だよコウキ、変なことつかい出してきたら私が絞めといてあげるから。コウキは何も心配しなくて良いんだよ?」

「……人の話聞いてる?」

コウキが悲しい目で見つめる先には、過去の思い出に浸り続ける懐古主義者が一人。人の話を聞こうともしないで、謔言のように耳障りの良い言葉を吐き出して、彼女は過去の世界の囚人と成り果てていた。

もう、この状態になってしまったら、自分の都合の良いところしか聞こえないし切り取らない。湧き出てきた感情は怒りだ。ただ純粹な怒りの感情が再燃し始めていた。この聞かん坊に今まで惚れていた事実に対して、このわからずやに人生の多くの期間を捧げていたことに対して。憐むような感情は波引き、顔をだした砂浜は真っ赤に燃え盛っていた。

これからコウキが取る行動は、なにも過去の人と成り果てたヒカリを解放してやろうと言った親切心によるものでは断じてない。むしろその逆、忌々しい魔女を火炙りにして狂乱するような、完璧な排他的行動を指すものであった。禍々しい過去の失敗を今すぐにでも消し去りたい衝動に駆られ、寢室を後にする。

「まっ、待ちなさいコウキ！ 待ちなさいって言ってるの!？」

何も言わずに部屋を飛び出したコウキの後を追いつがる。が、その行き先は別れを告げる玄関ではなく、生活の中心となるリビングであった。不審に思いながらも、安堵で息を整えるヒカリは耳にする。

チチチチチツカ

その音が何か理解するのに時間は要らなかった。

「いやあ———!!」

コウキは少し混じり楽しそうに顔を緩めながら、本の角を青い炎に突っ込む。絶叫しながら取り上げようとヒカリは飛びつく。その猪突猛進ぶりに燻り始めた本を振り上げ、取り戻そうと天高く一点に直立したヒカリの細腕を掴み上げた。

表紙の端が黒ずんでいることに涙を浮かべながら、嗜虐心をくすぐる怯えた顔を眼下にして、最後の辞世の句でも引き出そうかなあと、本を炙り出しのように表裏を炎で撫でてみた。

「イッグ、やべでください！ ウツだいぜつなだがらものだんです！
がえじてください」

「？ 炙るのやめろって？」

本を左右に行き来させる動きを止め、炎の温度がもつとも高い中央に本を密着させた。ヒカリの反応は薄い。ショックが大きすぎて、目の前の情報が無意識のうちにシャットアウトしているのかもしれない。

紙だからといって、束になった本はすぐさま火球になることはなく。ほどなくして、十分な温度となったエネルギーを取り込んで火は勢いよく燃え上がった。半分ほどを食い、表紙が溶けて隔たっていく時間はみるみるうちに感覚を狭める。

炎は有史以来、天敵から身を守るセーフゾーンの役割やエネルギー効率を上げる”焼く”調理方法の確立、また人の生存圏を劇的に広げた暖としての役割など様々な革命をもたらした。

普段なら調理がメインのため意識して拝むことすら少ないが、コウキが本を完全に解読不能と判断する短い間、青とオレンジの共演はキャンプファイヤーの様相を呈し、ただ炎の魅力に引き込まれたコウキと、放心状態でただ見ているだけのヒカリという構図を作り出す。

後の祭りとなり、ヒカリの領内に自分の私物が消え去ったことに満足しながら、コウキは呪縛からの解放を肌で感じているのだった。……いまだべつたりひつつくヒカリといえは、現実逃避するようにコウキにすっかり体重あずけ、”の”の字を書きながらへへへと笑っていた。

心ここにあらずのヒカ리를ソファアに放置し、これでもう自分に執着することはないだろうとホッと一息つく。

「…………じゃ、元気で」

まゆをかえして立ち去ろうとする袖口は、あらんかぎりの力を込めて引つ張り留められた。

「お、お願いします。見捨てないでください……」

「新しい彼氏さんいなかった？ その人に慰めてもらったほうがいいんじゃない？」

「コ、コウキだけなんです。本当はコウキが嫉妬してくれるのを待ってたんです。後にも先にも私の恋人はコウキだけなんです……」

「そんな大袈裟な……」

「大袈裟なんかじゃない!! コウキはどんな時でも優しくて、誰よりも私のことを考えてくれて、強くて勇敢でカッコよくて、好きって言われるたびに天にも登る気持ちになるし、それからそれからそれからあ……」

「……」

「待って!! 行かないで下さい!! なんでもします! それくらいコウキのことが好きなんです!! どうか、どうか、行かないで下さい!

お願いします、私を置いていかないでえ……」

「……」

拜むようにせがむように、太腿に抱きついて汚い体液を擦り付けながら、ひたすら独白と懺悔を続けるヒカリ。あきらめの悪いその態度にもはや感心すら抱くようになったが最後、コウキは今までの趣向返しと、永遠に解けないパズルを投げ渡す。

「あつ、ヒカリが僕の周りを貶めるような行動をとったその瞬間、永久にヒカリのこと嫌いになるから……。それじゃあ、さよなら」

手のひらからするりと抜ける感覚は、今度こそヒカリを思考停止へと追いやった。

コウキのいない毎日がこんなに空虚だったなんて……。

もともと殺風景だった部屋は、風通しをよりよくして。ベッドに死体のように横たわるヒカリは、わずかな栄養で働く頭でそんなことを考えていた。あれから、しばらく日はたったが喉はろくに食べ物を通さず、ねじまき人形の大事なネジ部分を無くしたように致命的状況が続いているのだった。

今にも死にそうな体には、早急な救いの手が伸ばされるべきだが、ヒカリが望む勇者はこの世にたった一人しかない。

「コウキ……」

いるはずもない守護者の名前は無意識に。唯一ヒカリに残された思い出を引っ張り出して自分を慰める。なんて惨めな行為なんだ。けれど、これをしていないとこのまま世界に溶けてしまいそうなほどの無気力感に蝕まれるのだから仕方がない。

学校を体調不良を理由に休みっぱなしで、この言い訳もいつまで続くことやら……。もうすでに学校から親へ連絡が入っているかもしれない。どうしよう……。転校にでもなったら。

頭をよぎるのはそのことばかり。このままウジウジしていたら、もう二度とコウキとは会えないかもしれない。でもあんな明確な拒否反応を見せつけられて、どんな顔をしてコウキに近づいたらいいのか

の答えが出ずに、両者の板挟みの中でなすすべなく時間を浪費を繰り返すのだった。

もう、まともにコウキは相手してくれないかもしれない。それならせめて、遠くからでもコウキの姿をこの目に焼き付けたい。そんな気持ちでなんとか残されたエネルギーを駆使してユラリユラユラと起立して、闇夜に漂う蛾類のようにただただ力なく学校に引き寄せられていくのであった。

キーン　コーン　カーン　コーン

合間合間を告げるチャイムに疎外感を食った。本来なら学校に幽閉されているであろう時間帯、フラフラとした所作にどことなく世間の目が突き刺さる錯覚をおぼえた。それが可愛いではなく美人の分類で、含有に顔面蒼白の記載があれば、奇異の視線はおのずと強く。

息も絶え絶え、ようやくたどり着いた校門前。不幸にも、現在は長針と短針がテッペンで折り重なるフリーダム。拘束を外れた学生や社会人が機械的に人気を増すような、社会からそれた異端者を排斥するような時間帯。無用心にも、またオープンにも、親切にも開け放たれた正門の前で一巡二巡。不自然な行動は、凶らずとも人々の視界に映り込んでしまう。

「キミ、大丈夫かい？」

「は、はい……お気遣いなく」

同族を見つけた喜びなのか、青白い顔と薄気味悪い笑顔のダブルコンボで、寄れたスーツ姿の男が語りかける。客観的に見て、今の自分が回りからどう思われているのか嫌でも理解せざるおえないヒカリは、明らかに自分に向けての言葉に退路を塞がれた。誰だ、お前。

慣れない作り笑いを浮かべながら、脳内に走るのは疑問の数々。な

んで私が下手に出ないといけいないんだ。なんで私が気を遣わないといけいないんだ。なんで私がこんな目に合わなくちやいけいないんだ。そして……なんでコウキは私のそばにいてくれないんだ。

四肢を頬擦りして舐め回すような視線が気持ち悪い。イツトキの紋所も、そもそも知識としてなければ単なるコケ脅し。いつもなら私を背に預けてくれるナイト様がいなかったからか、遮るものない直線的視線は、白昼堂々と犯行が行われてしまう恐怖を与えた。

やんわりとした拒絶は伝わっているはずなのに、小汚い男から伸びる腕に小さく悲鳴を上げる。自分ではどうすること出来ない無力感に蝕まれ、苛まれ、刻まれて。コウキという名のピースで埋めてはじめて完成するヒカリは、戸惑っていたはずの校門を頼りに飛び込むのだった。

人目を避けるように影から影へ。そこには、肩で風を切って胸を張って自尊心で体を満たしていたヒカリの姿はなかった。本校の生徒なら一度は話題にあげるような注目の的。男子なら一度は彼女にするような妄想に駆られ、女子ならばその財力学力容姿振る舞いのいづれか全てか、憧れかまたはたまた嫉妬を抱く。学校内ならば知らない人はいないであろう誰かが、豹変したヒカリの姿を見て、二度見して、ギョツとして、口を閉ざして。

もはや彼女は、彼らの知ってたるヒカリではなかった。いや、これがコウキを欠いたヒカリ本来の姿なのかもしれない。目耳にしてしまふ、明らかに自分を題材にしたおしゃべりは、弱り切ったヒカリの弱い心臓を突く痛ぶる。目立ちたくなくとも、ミソツカスと成り下がっても人を引きつけ率いるカリスマ性は健在なのか、本人が望まなくとも人の目を集めてしまえば、為す術なく俯くしかなかった。

それでもコウキを探して歩みを止めないのは、自分の半身とも形容しがたいコウキの姿を一眼拝みたい気持ちが強くなる一方だったから。ポツカリ開いた心の隙間を、コウキならば、コウキならきつと埋めてくれるという楽観的思考で自分を奮い立たせた。

コウキの姿をほんの一瞬、ちよつとキリリとした真面目な顔を見た

り、少し声を聞いたり、ちよつぴり心配されたり。ここまで相当のエネルギーを消費したから、しつかり充電して帰りも私を保つていられるようにしたかった。それだけでよかった。それ以外は高望みしなかった。だから……なんとなく一人ぼっちのコウキの姿を遠くから眺めるのが理想系で、あわよくばなんて、そんな流暢な事を考えられないくらいに追い詰められていた。

そこに、ひとときわ光を帯びている後ろ姿があった。見間違えるはずもない。私のよく知ってたる、いま私がつも待ち望んでいたナイト様の背中だ。植え込みにしゃがんで、ただただ目の前の報酬に集中する。木陰のベンチに座り、チラリと除いた横顔が、呼吸を荒く激しく頻りにさせる。

表情は久々に緩み、トロリとメスの顔になり、涎が出そうになるのをすんででジュールリ。その距離10M。いつもの調子で声をかければ、決して届かない距離ではない。

そんなどうしようもない久々のリアルが私の思考をかき乱して、狂乱させて、興奮させて。今すぐにでも、ああ……コウキ、友達も出来ずに一人寂しく昼食なんて可愛そう。私が後ろから抱きしめてあげて、一緒に昼食をとってあげればコウキも喜ぶよね？ またよりを戻して前よりもっと親密になれるよね？

ガサガサとゆつくり小枝をかき分けながら、コウキへと伸ばした手は震えていた。近付こうとした動きは、視界に飛び込んで来てしまった忌々しい女のせいでも中断される。

「ングッ」

強力な結界が発動したように茂みに体を再び埋め、せつかくの機会を削がれたことに一方的に相手を睨みつけた。駆け寄った二人が慎ましく会話していることに内心ひどく怒りながら、それでもコウキの声を聞くチャンスだと耳をそばだてる。

念力集中、二人の会話を聞き取るだけに意識を働かせ、ようやく耳にした内容はハンマーで後頭部をかち割られるようなデートの話題。

コウキが主導する、放課後デートのお誘いであった。

羨ましい。今まで数えるのも馬鹿馬鹿しくなるほどにデートを繰り返してきた私達だったが、いつしかコウキから誘われる機会はさっぱりなくなってしまった。

(私達二人だけの思い出なのに……)

唯一の心の支え、脳内メモリーにすら汚染が広がるのに耐えかねて口元を押さえて、わずかばかりに口に含んだ朝食はドロドロの溜飲食となつて口から出力された。制服へとハネて飛んで、ヒカリの現状を嘲笑うかのような不幸はトドメとばかりに心を抉る。

それでもコウキから栄養を受け取りたいと、テニス審判台の主人がボールを追うように、発言者から発言者へと止めどなく目を釘付けに。視線の先に伸び伸びと、日光を精一杯浴びて栄養を独り占めするあの女に嫉妬の嵐が鳴り止まない。

あいつの皮を剥いで、あいつに成り代わって存分に、余すことなくコウキに甘えたい。メガネをかけたなら愛してくれるだろうか？ 優しく語りかければ好きになつてくれるだろうか？ ちよつとイタズラっぽく接すれば笑つてくれるのだろうか？

料理がヘタになればあの髪型ならこの場所で会話すれば図書委員になれば彼女に成り代わつたら、コウキは私を愛してくれるのだろうか？

そんな込み入った空想に浸っていると、胸を撃ち抜かれる。幼い頃、当たり前のように目の当たりにしていた、私に向けられていたはずの無邪気な笑顔が覗く彼の柔らかい目。チラリと横顔が、ベンチに燦然と輝いて見えた。

いいな、いいな、いいな、いいな。もう一回。近くで、もう一回だけ見せて？ 今度は私に笑いかけて？ 今にも崩れ落ちてしまいうな、こんなボロボロの私を救つて？ 救い出して？ 私しか見ないで？ 私だけ愛して？ 神様、どうかお願いします。お願いです。わ

たしを、私を世界で一人きりにしないで……。

夕日を人知れず隠せば、変わって月が夜番をこなす。小さく灯った街の光も、一斉に咲けば宇宙すら霞ませる。暑かろう寒かろか所構わず体温を通わせ、人気のない空間一つありさえすれば、たった二人の世界は出来上がる。メインステージには、長いこと会話のない両者の間。下座の舞台袖には、満身創痍の凝滞で今にも卒倒しそうなストーリーの姿。

沈黙はステージで破られる。決心したように肩を掴んで向き合つて、恐らく甘い言葉の二、三が交わされ、ハッピーエンドとばかりに唇は重なった。自分をメインヒロインだと信じて疑わないヒカリは、そのあまりに残酷な幕引きに、一刻も早く飛び出して、豚女を突き飛ばして、汚されたナイト様の唇を本当の運命で上書きしたい衝動に駆られる。

でも……コウキに嫌われたくない。もうコウキに冷たい目でみられたくない。はじめてあった時のような、純粹な瞳を向けてほしい。だから、だから、だから、だから……。

狂おしいほどの愛欲の炎に身を焼かれ続ける。いま一度その欲望が爆発してしまえば、もう関係性の修復なんて一生見込めない。残酷にも好物を眼前でチラつかせながら「待て」を言いつけられている子犬のように、コウキへの信頼を示し続け和解への道を待ち続けるのか、それとも今にもむしゃぶりつきたい欲望をとるか狭間で永遠に弄ばれる。

一度口にしてしまえば、もつともつと欲しくなる海難先の海水のように凶悪な依存性。物語の結末が気に入らない子供を、数百倍ひどく濃く仕上げたような愚図りは、ついに記憶の混濁をも許容し始める。体がこれ以上は不味いとヒカリの都合のいい世界へと改竄を図る。ヒカリ自身が見捨てられる前の、まだやり直せるはずの世界に彼

女だけ帰る。

何かのスイッチが入る音がした。

ついさっきまでの出来事を思い返し、唇に軽く手を触れ、おもわずクスリと恥ずかしさを笑みに隠す。ジャケットをハンガーにかけながら、コウキは世界はこんなにも色づいていたのだろうかと思わせながら浸っていた。

ブルリと震えたスマホを取り出し、コカゲからのメッセージに小躍りしそうな勢いで嬉しくなって画面をタップする間際、玄関の戸が叩かれた。

……こんな時間に誰だろうか。身に覚えのない来客にしばし考えをめぐらせていると、ドンドンと短い間隔のノックに混じって、誰かの声が混じって聞こえる。

「ねーコウキーいるんでしょー、ここ開けてよー」

……聞き違えるなんてあり得ない。つい先日縁を切ったはずの彼女が、この扉を挟んだ先で待ち構えていた。帰宅して直後の現状とその口ぶりから、確実に後をつけられていたという恐ろしい事実が浮かび上がってくる。

なんで？ どうしてまた？ 一体何がしたい？ 恐怖心で体は動かず、変わって脳みそばかりが回転を早くして。扉が絶えず震え続けていることに、思わず鍵が掛かっているかの確認をするほどであった。

黙したまま、ただ時間ばかりが過ぎていく。居留守を使ったところで帰ってくれるわけもないのに、こんな時どんな行動をとったらいいのか分からず、だんだん大きくなってくる彼女の独り言とノック激し

さに玄関から一步身を引いた。

「私のことを見捨てるなこのクズ人間!! いままで散々尽くしてあげたのに!! 人の気持ちを踏み躪っておいて!! お前に人の心はないのか!! 聞いているの!?! おい、コウキ!! ここを開ける!!」

近所迷惑も厭わないヒステリックな叫び声だ。

体当たりする音が。

ひたすら動くレバーだ。

僕の思考判断を鈍らしていく。

何を思ったのだろう、気がつけば玄関のロックを外している自分がいた。近所の目が恥ずかしかったとか、親に連絡が行くのが怖かったのだとか、自分がなんとかしなきゃと思ったのか。とにかく、その時の自分は玄関を開け放つことが何よりの最善策に見えてしまった。

「コウキ♡」

酷く沈んだ目をしながら、興奮したように頬を赤く染める顔の近くには、包丁が掲げられていた。咄嗟に扉を閉めようとする動きは、凶器が突きつけられて血を見てしまったことで反射的に手を引つ込め、彼女の侵入を許してしまう。もはや警察沙汰なのは明らかだ。

当てられる普通じゃない形相を前にして、反撃する気は失せたただ恐怖が後退を指示する。こんな狭いアパートの逃げ場など、あつという間に姿を消し去る。背後を壁に阻まれるまで後退りして、ようやく次の指示を下せるようになる。

一瞬、助けを呼ぼうと叫ぶ選択肢が覗く。が、興奮した加害者に血塗れにされる未来しか想像できず、選択肢は消滅。フツと包丁が首筋を撫でる。身じろぎすら許さず息を呑む。

「ああ、すごくすごく寂しかった」

挨拶のように接吻をかまされた。相手のことを微塵も考えていないような欲に塗れたその行為は、勢いのあまり彼女の歯と唇が衝突する。鉄の味が口内に滲み出た。構わず滲んだ血を堪能するかのように二度、三度。数えるのもあやふやになるように酸素を奪われる。凶暴な肉食獣が獲物を食うような荒々しさ。視線は変わらず刃物を映す。

酸素不足で鈍くなりゆく思考のさなか、考えることはいかにしてこの場を収めるか。気の触れた彼女をこれ以上刺激せず、穏便にすませるような未熟な知恵を絞りに絞った。首筋に冷たい感触が生まれる。

「私のこと好きっていつて」

「??？」

「早く言えよ」

鋭い衝撃が走った。たとえ頭がおかしくなってもしまったとしても、どこか彼女のことを信頼していた自分がいた。それゆえに、脇腹に突き刺さった異物を見て、本当の意味で恐怖が始まった。

「へへ、すごく痛そう。でもコウキが全部悪いんだよ?」

「かあ、あかあ」

法律だとか倫理だとかの枠を超えてやってきた。テレビ上の、遠い世界の出来事が、ただ目の前で起きただけなんだ。スーツを着こなした穏健派が次の瞬間にはひっくり返って玄関口を目指す。

しかし、致命傷を受けた重荷の身には途方もない道。夢に見たあの日のように出口が伸びて、歪んで、失速して。目覚めるまで終わらない悪夢のよう。脇腹を抑え、血を滴らせながら、背後からは優雅な気配が迫る。トイレに駆け込む以外、打開策はなかった。

今のご時世に洋式便所、完全な個室だ。暗闇へ降っていく下水道は、どうしようもなく救いのような出口と錯覚してしまう。脇腹を差す鋭い痛みが、止めどなく滴る血を鮮明に意識させた。

僕は……ここで、死ぬのだろうか。ようやく、まともな日常を送れると安堵していたのに。せつかく、クラスのみんなと仲良くなれたのに。やっと、コカゲと恋仲になれたのに。こんなに、呆気なく、終わっちゃうんだ。なんだか、悲しいな……。

まだなにも成し遂げられていない自分がいることに気が付き啜り泣く。減りつづけている血でなんとか酸素を届けようと、汚物の匂いを忙しなく口に取り込みながら、過去の呪縛に未だ縛られている意識を……意識が……。

電子音で目を覚ます。見覚えのない天井、点滴が腕まで伸び、リネの肌触りでようやくここが病院だと理解した。

広い。九、十人ほどがベッドに横たわれるほどのスペースに、出口から離れる中心に豪勢にドカンとベッドが居座り、そこに心電図に繋がれた僕がいた。

ホテルのスイートルームのようだが、流石に院内だけあってか広さの割に寛げるスペースは少ない。みなまでいわなくても、ここが値の張る病院であることは想像に難しくなく。また両親に迷惑をかけてしまったんだなと誹謗中傷気味に冷笑する。それだけ自分が重体の身であったのだろうと予測を立てば……そうだ、早くみんなを安心させなきゃ。

点滴スタンドに手を伸ばし、立ち上がろうと下半身に力を込めた瞬間、思い出したかのように痛みが走った。腹の奥底が燃えるような鈍痛に、たまらずに脇腹を押さえ込みながら床に落下する、妙な違和感を実感する。あれ……この傷……。その後すぐに、入室してきた看護

師に助け起こされることで事無きを得た。

ベッドに戻りしばらくして出迎えてくれたのは、白衣を慌ただしく着こなした先生と、先程の看護師の二人だった。体の様子を尋ねられ、座つていいかね？ と尋ねたのはおそらく僕の担当医でいいのだろうか。

看護師が小脇に抱えていたカルテを受け取って、どっこいしょつと緩慢に腰掛けると、問診が始まる。繰り返される質問に時折考え込みながらも答えていくと、先生の顔がだんだんとクシャついてくる。

「えーと、タセツナさん。すでに気がついていないかもしれませんが一応ご説明しておきます。外傷の手術は無事成功しました、ただ。……単刀直入に、記憶障害です。ケガによるショックで、関連性のある情報に体がロックをかけているかもしれない。今の段階ですとどの程度か把握しかねますが、これは人間が手にしている正当な防衛手段ですので、何も心配は要りませんよ？」

「はあ、はい……」

薄々と、病院に来る前の記憶がないことからある程度の予想はしていた。けれど先生が気を遣っていてくれてる割に、僕にショックの四文字は、いや一文字たりとも浮かんではこなかった。これは単純に、なくなつたことを悲しむ記憶がなくなつてしまったからだろう。自分の預かりしらぬところで騒ぎが起き、そのことで後日謝罪を申し込まれて困ってしまう状況と似ている気がする。そんな当事者意識のカケラも備わっていない僕は、二人の笑顔と同情が合わさった器用な表情に、ただただ黙りこくるしかなかった。

コンコン

「……お知り合いかな？ 私達はお邪魔だろうから、ここで失礼させて貰おうかな」

「はい。ありがとうございます」

腕時計をチラリと眺める先生に、お礼と会釈で感謝を伝えると、二人は逃げるように僕に背を向けた。出る直前、扉の向こうの人物へと深々とお辞儀。影がだんだんと伸び姿が窺えるようになる。

口を閉じるのを忘れるほどに整った顔立ち。白雪が降りしきったような一点の曇りのない肌。もの虚げな吊り目に、主張の小さい鼻。溶け込むような黒の長髪は、川が流れるように艶やかだ。

強烈な既視感を覚えながら、その正体はつきりしない。消えた記憶の中に、彼女に関する記憶が混じっていたのだろうか。初めて失った記憶の重大さを知った。

「は、はじめましてになるのかな？ ごめんなさい。廊下でちよつとだけ聞こえてきちゃって……。でも、元気そうで安心しちゃった」

傷がひときわ疼き出した。